

平成14年度
神戸市埋蔵文化財年報



2005
神戸市教育委員会

訂正

本文47頁中fig. 56の調査地位図が間違っております。ご面倒ですが、下記のとおりご訂正くださるようお願いします。



fig. 56

調査地位図

1 : 2,500

平成14年度
神戸市埋蔵文化財年報

2005

神戸市教育委員会



fig. 1 舞子古墳群 3号墳

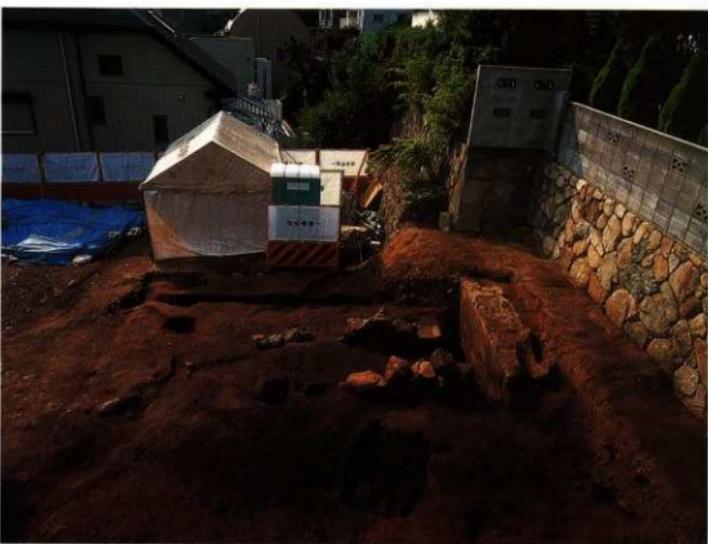


fig. 2 岡本梅林古墳 1号墳



fig. 3 岡本梅林古墳 出土遺物

序

本年、平成17年は震災から10周年にあたり、これにちなんださまざまな行事や催しが行われております。

当教育委員会におきましても兵庫県教育委員会と共に被災した市町の協力を得まして「震災から10周年 発信する地域文化」展を開催し復興事業の推進と埋蔵文化財の保護という問題に取り組んだ10年の成果の一端を報告させていただきました。

さて、このたびの年報で報告させていただきます平成14年度におきましては、地域の皆様の強い要望にこたえ実施いたしました兵庫津遺跡の調査において柳原惣門跡が確認され、小路大町遺跡では県下でも数少ない古代の馬鍬が発見されるなど貴重な成果をえることができました。

これらの遺跡をはじめ本書に掲載されました調査の成果をとおして埋蔵文化財へのご理解を深めていただければ幸いです。

最後に、この年報を作成するにあたりましてご協力いただきました関係諸機関、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成14年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会 (史跡・考古資料担当)

檀上重光 前 神戸女子短期大学教授
工楽善通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
和田晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長 西川 和機
社会教育部長 岩畔 法夫
文化財課長 桑原 泰豊
社会教育部主幹 渡辺 伸行
(埋蔵文化財指導係長事務取扱)

同 宮本 郁雄
事務担当学芸員 口野 博史
佐伯 二郎
橋詰 清孝
埋蔵文化財調査係長 丹治 康明
文化財課主査 丸山 潔
菅本 宏明
千種 浩
事務担当学芸員 内藤 俊哉
調査担当学芸員 西岡 巧次
西岡 誠司
黒田 恭正
山本 雅和
安田 滋
須藤 宏
阿部 敬生
浅谷 誠吾
井尻 格
石島 三和
関野 豊
阿部 功
中村 大介

平田 明子
中庭 さやか

(財) 神戸市体育協会

会長	矢田 立郎
副会長	鞍本 崑男
常務理事	梶井 昭武
総務課長	谷川 博志
総務課主査(兼務)	丸山 潔
同(兼務)	菅本 宏明
事務担当学芸員	池田 肇
調査担当学芸員	谷 正俊
	前田 佳久
	山口 英正
	川上 厚志
	中谷 正

2. 本書に記載した位置図は、神戸市立中学校教育研究部編集(神戸市体育協会発行)5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2500分の1地形図を使用した。
3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 平成14年度事業の概要については橋詰 清孝が、IV. 保存科学調査・作業の概要については中村 大介が執筆した。また編集については、丹治 康明の指導のもとに内藤 俊哉が行った。
4. 市内各遺跡の調査次数については、現在改正作業中である。
5. 表紙写真は、小路大町遺跡第4次調査(本文153頁)出土の馬鎌で、裏表紙写真は兵庫沖遺跡第31次調査(本文61頁)出土の備前焼小壺である。

目 次

序

例言

I.	平成14年度 事業の概要	1
	平成14年度 埋蔵文化財発掘調査一覧	10
	平成14年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図	16
II.	平成14年度の復興事業に伴う発掘調査	23
1.	森南町遺跡 第1次調査	23
2.	出口遺跡 第6次調査	27
3.	岡本梅林古墳 第1次調査	33
4.	郡家遺跡 第71次調査	37
5.	西求女塚古墳 第13次調査	39
6.	雲井遺跡 第14-1・2次調査	43
7.	兵庫津遺跡 第29次調査	47
8.	兵庫津遺跡 第30次調査	55
9.	兵庫津遺跡 第31次調査	61
10.	兵庫松本遺跡 第12-1~4次調査	65
11.	兵庫松本遺跡 第14・15次調査	69
12.	兵庫松本遺跡 第16次調査	71
13.	上沢遺跡 第48次調査	73
14.	上沢遺跡 第49次調査	77
15.	上沢遺跡 第50次調査	81
16.	上沢遺跡 第51次調査	85
17.	御蔵遺跡 第50次調査	91
18.	御蔵遺跡 第51-1・2次調査	101
19.	水笠遺跡 第22次調査	105
20.	二葉町遺跡 第16次調査	107
21.	松野遺跡 第35・36次調査	113
22.	戎町遺跡 第37・40・41・42・43次調査	115
23.	戎町遺跡 第38次調査	125
24.	戎町遺跡 第39次調査	131
25.	舞子古墳群 舞子台支群3号墳 第19次調査	133
26.	福住遺跡 第2次調査	141
27.	端谷城跡 第3次調査	143
28.	今津遺跡 第15次調査	147

III. 平成14年度の通常事業に伴う発掘調査

1. 本庄町遺跡 第9次調査	149
2. 小路大町遺跡 第4次調査	153
3. 住吉宮町遺跡 第37次調査	157
4. 郡家遺跡 第72次調査	161
5. 西岡本遺跡 第5次調査	163
6. 御影郷古酒蔵群 第1次調査	165
7. 二宮遺跡 第2次調査	169
8. 雲井遺跡 第16-1・2次調査	171
9. 中山手西遺跡 第2次調査	175
10. 兵庫津遺跡 第26次調査	177
11. 日下部遺跡	181
12. 野瀬遺跡 第2次調査	185
13. 野瀬北遺跡 第1次調査	191
14. 長田神社境内遺跡 第15次調査	203
15. 大手町遺跡 第7次調査	205
16. 大手町遺跡 第8次調査	211
17. 新方遺跡 第44次調査	213

IV. 平成14年度の保存科学調査・作業の概要

挿図目次

fig. 1 舞子古墳群 3号墳 【カラー写真】 卷頭	fig. 43 XV区全景 【写真】 41
fig. 2 国本梅林古墳 1号墳 【カラー写真】 卷頭	fig. 44 XVII区地震痕跡 【写真】 41
fig. 3 国本梅林古墳 出土遺物 【カラー写真】 卷頭	fig. 45 XVI区平面図 41
fig. 4 全面展示『ドロだらけでなにしとん?』【写真】 2	fig. 46 XIV区 井石細部 【写真】 42
fig. 5 「古代の音色」演奏会 【写真】 2	fig. 47 XIV区 土器出土状況 【写真】 42
fig. 6 考古学講座「土器・埴輪・土笛をつくろう」【写真】 4	fig. 48 調査位置図 43
fig. 7 公民館講座 サマースクール古代人に挑戦 【写真】 4	fig. 49 調査区平面図 44
fig. 8 大祓山まつり 【写真】 6	fig. 50 SD201平面図 44
fig. 9 現地説明会(柳原惣門) 【写真】 6	fig. 51 第2遺構面全景 【写真】 44
fig. 10 調査位置図 23	fig. 52 14・2区 第1遺構面全景 【写真】 45
fig. 11 第1遺構面平面図 23	fig. 53 穴窓住居・柱復元図 45
fig. 12 第2遺構面平面図 24	fig. 54 穴窓住居 【写真】 46
fig. 13 SD02 桁列・板材 【写真】 25	fig. 55 調査区平面図 46
fig. 14 第2遺構面全景 【写真】 25	fig. 56 調査位置図 47
fig. 15 調査区南壁断面図 26	fig. 57 調査区位置図 48
fig. 16 第2次出土 巡方 27	fig. 58 第1遺構面平面図 48
fig. 17 調査位置図 27	fig. 59 SK11 【写真】 48
fig. 18 調査区西半部全景 【写真】 28	fig. 60 SK07 【写真】 48
fig. 19 調査区平面図 28	fig. 61 SK15 【写真】 48
fig. 20 ST01・Pit45平面図・断面図 29	fig. 62 SD03・05 【写真】 48
fig. 21 ST01 【写真】 30	fig. 63 第1遺構面全景 【写真】 49
fig. 22 Pit45 【写真】 30	fig. 64 第2遺構面全景 【写真】 49
fig. 23 調査地東壁断面図 30	fig. 65 出土標柱 【写真】 50
fig. 24 出土遺物実測図(1) 31	fig. 66 出土標柱(拓本) 51
fig. 25 出土遺物実測図(2) 32	fig. 67 猫門跡 【写真】 52
fig. 26 ST01出土遺物 【写真】 32	fig. 68 出土遺物実測図(1) 53
fig. 27 調査地位置図 33	fig. 69 出土遺物実測図(2) 54
fig. 28 石室内遺物出土状況 【写真】 34	fig. 70 調査地位置図 55
fig. 29 石室平面・立面・断面図 34	fig. 71 調査区断面図 56
fig. 30 第2遺構面全景 【写真】 35	fig. 72 第1遺構面平面図 56
fig. 31 第2遺構面平面図 35	fig. 73 第2遺構面平面図 57
fig. 32 1号墳出土遺物実測図 36	fig. 74 第3遺構面平面図 57
fig. 33 1号墳出土遺物 【写真】 36	fig. 75 SK04・05 【写真】 57
fig. 34 調査地位置図 37	fig. 76 第1遺構面(北区) 【写真】 57
fig. 35 調査区断面図 37	fig. 77 第2遺構面(南区) 【写真】 57
fig. 36 調査区平面図 38	fig. 78 SK09 【写真】 58
fig. 37 調査区全景 【写真】 38	fig. 79 第4遺構面全景 【写真】 58
fig. 38 調査地位置図 39	fig. 80 第4・5遺構面平面図 59
fig. 39 調査区配置図 40	fig. 81 調査地周辺 【写真】 60
fig. 40 XIV区右列 【写真】 40	fig. 82 出土遺物実測図 60
fig. 41 XIV区平面図 40	fig. 83 調査地位置図 61
fig. 42 XV区平面図 41	fig. 84 第1遺構面平面図 62

fig. 85 第2遺構面平面図	63
fig. 86 第3遺構面平面図	63
fig. 87 S K206〔写真〕	64
fig. 88 出土遺物実測図	64
fig. 89 調査位置図	65
fig. 90 第12-1次 S B101・102〔写真〕	65
fig. 91 第12-1次 調査区平面図	66
fig. 92 第12-1次 自然河道内遺物出土状況〔写真〕	67
fig. 93 第12-2次 調査区平面図	67
fig. 94 第12-3次 調査区平面図・断面図	68
fig. 95 第12-4次 調査区全景〔写真〕	68
fig. 96 調査位置図	69
fig. 97 第14次調査区平面図・断面図	69
fig. 98 第15次調査区平面図・断面図	70
fig. 99 第15次調査区全景〔写真〕	70
fig. 100 調査位置図	71
fig. 101 第1遺構面全景〔写真〕	71
fig. 102 握立柱建物〔写真〕	71
fig. 103 調査区平面図	72
fig. 104 調査位置図	73
fig. 105 S D01〔写真〕	73
fig. 106 S D01 遺物出土状況〔写真〕	73
fig. 107 調査区全景〔写真〕	74
fig. 108 調査区平面図	74
fig. 109 S E01(上面)〔写真〕	75
fig. 110 S E01(尙物)〔写真〕	75
fig. 111 S E01平面図・断面図	75
fig. 112 S E01断ち割り状況〔写真〕	76
fig. 113 調査位置図	77
fig. 114 調査区平面図・断面図	78
fig. 115 第2遺構面全景〔写真〕	78
fig. 116 調査区平面図・断面図	79
fig. 117 第1遺構面全景〔写真〕	80
fig. 118 第2遺構面全景〔写真〕	80
fig. 119 調査区平面図・断面図	80
fig. 120 調査位置図	81
fig. 121 1区 第3遺構面全景〔写真〕	82
fig. 122 1区 平面図	82
fig. 123 2区 S D01・02〔写真〕	84
fig. 124 2区 胞衣壺〔写真〕	84
fig. 125 胞衣壺出土状況平面図・断面図	84
fig. 126 2区 平面図	84
fig. 127 調査位置図	85
fig. 128 第1遺構面平面図	86
fig. 129 第2遺構面平面図	86
fig. 130 IV区第1・2遺構面全景〔写真〕	87
fig. 131 S B01・S X01〔写真〕	87
fig. 132 第3遺構面平面図	88
fig. 133 第4遺構面平面図	88
fig. 134 出土遺物実測図(1)	89
fig. 135 出土遺物実測図(2)	90
fig. 136 第2遺構面土器溜り〔写真〕	90
fig. 137 調査位置図	91
fig. 138 1区 平面図・断面図	92
fig. 139 2区 平面図・断面図	92
fig. 140 3区 平面図・断面図	92
fig. 141 3区 調査区全景〔写真〕	93
fig. 142 5区 調査区全景〔写真〕	94
fig. 143 7区 調査区全景〔写真〕	94
fig. 144 4・5・7区 平面図・断面図	95
fig. 145 9区 平面図・断面図	97
fig. 146 10区 調査区全景〔写真〕	98
fig. 147 12区 平面図・断面図	98
fig. 148 10区 平面図・断面図	98
fig. 149 9区 窪穴住居〔写真〕	99
fig. 150 調査位置図	101
fig. 151 51-1 3区全景〔写真〕	102
fig. 152 51-1 調査区平面図	102
fig. 153 51-2 A区流路・集石遺構〔写真〕	103
fig. 154 51-2 A区平面図	103
fig. 155 51-2 調査区全景〔写真〕	104
fig. 156 調査位置図	105
fig. 157 調査区平面図	106
fig. 158 調査位置図	107
fig. 159 調査区平面図	108
fig. 160 16-3次 調査区全景〔写真〕	110
fig. 161 S X01〔写真〕	111
fig. 162 S B05〔写真〕	111
fig. 163 調査位置図	113
fig. 164 調査区平面図	114
fig. 165 調査区全景〔写真〕	114
fig. 166 調査位置図	115
fig. 167 第37次調査区全景〔写真〕	115
fig. 168 第40次調査区全景〔写真〕	115
fig. 169 第1・2遺構面平面図	116
fig. 170 調査区平面図・断面図	117
fig. 171 第1遺構面全景〔写真〕	118
fig. 172 第2遺構面全景〔写真〕	119
fig. 173 第1・2遺構面平面図・断面図	120
fig. 174 調査区平面図	121

fig. 175 第1遺構面平面図	122	fig. 220 調査地位置図	149
fig. 176 調査区断面図	122	fig. 221 調査区平面図	150
fig. 177 S X03 [写真]	123	fig. 222 S D01 [写真]	151
fig. 178 第2遺構面全景 [写真]	123	fig. 223 調査区全景 [写真]	151
fig. 179 第2遺構面平面図	123	fig. 224 S D01出土遺物 [写真]	152
fig. 180 第3遺構面全景 [写真]	124	fig. 225 調査地位置図	153
fig. 181 第3遺構面平面図	124	fig. 226 馬鹿出土状況 [写真]	154
fig. 182 調査地位置図	125	fig. 227 祭祀遺構 [写真]	154
fig. 183 調査区位置図	125	fig. 228 馬鹿塗測図	154
fig. 184 38-1区第1遺構面全景 [写真]	126	fig. 229 調査区平面図	155
fig. 185 38-2区 平面図	126	fig. 230 S X101 [写真]	155
fig. 186 38-3区 平面図	127	fig. 231 S X103出土遺物 [写真]	156
fig. 187 38-4区 平面図・断面図	127	fig. 232 S X101出土建築材 [写真]	156
fig. 188 38-5区 平面図	128	fig. 233 調査地位置図	157
fig. 189 38-6区 平面図	128	fig. 234 第1・2遺構面平面図	158
fig. 190 38-8区 平面図	129	fig. 235 S B201 [写真]	159
fig. 191 38-11区 方形周溝墓 [写真]	130	fig. 236 第3遺構面平面図	159
fig. 192 38-11区 平面図・断面図	130	fig. 237 調査区遠景 [写真]	160
fig. 193 38-12区 平面図・断面図	130	fig. 238 調査地位置図	161
fig. 194 調査地位置図	131	fig. 239 S B01川辺 [写真]	162
fig. 195 調査区断面図	131	fig. 240 調査区平面図	162
fig. 196 第2・3遺構面平面図	132	fig. 241 調査地位置図	163
fig. 197 第3遺構面全景 [写真]	132	fig. 242 調査区平面図	164
fig. 198 調査地位置図	133	fig. 243 調査区西半部全景 [写真]	164
fig. 199 3号埴石 [写真]	134	fig. 244 調査区東半部全景 [写真]	164
fig. 200 3号埴及び周辺現況	134	fig. 245 調査地位置図	165
fig. 201 3号埴 [写真]	135	fig. 246 調査区設定図	166
fig. 202 3号埴石室平面図・断面図	136	fig. 247 第1調査区平面図	166
fig. 203 3号埴全景 [写真]	137	fig. 248 石縄溝 [写真]	167
fig. 204 3号埴奥壁 [写真]	137	fig. 249 第2調査区平面図	167
fig. 205 3号埴裾部 [写真]	137	fig. 250 第1・2調査区断面図	167
fig. 206 S K01 [写真]	137	fig. 251 1区平面図・断面図	168
fig. 207 出土遺物実測図(1)	138	fig. 252 1区全景 [写真]	168
fig. 208 出土遺物実測図(2)	139	fig. 253 調査地位置図	169
fig. 209 出土遺物(1) [写真]	140	fig. 254 第1遺構面平面図	170
fig. 210 出土遺物(2) [写真]	140	fig. 255 第1遺構面全景 [写真]	170
fig. 211 調査地位置図	141	fig. 256 第2遺構面平面図	170
fig. 212 調査区平面図	142	fig. 257 第2遺構面全景 [写真]	170
fig. 213 調査地位置図	143	fig. 258 調査地位置図	171
fig. 214 トレンチ設定図	144	fig. 259 調査区北部全景 [写真]	172
fig. 215 調査区平面図・断面図	144	fig. 260 調査区平面図	172
fig. 216 2-3-4トレンチ全景 [写真]	145	fig. 261 S B01 [写真]	173
fig. 217 2-7トレンチ全景 [写真]	146	fig. 262 S D02・03 [写真]	173
fig. 218 調査地位置図	147	fig. 263 S K01平面図・断面図	174
fig. 219 調査区平面図	148	fig. 264 出土遺物実測図	174

fig. 265	調査位置図	175
fig. 266	S B01平面図・断面図	175
fig. 267	調査区平面図	176
fig. 268	調査区全景〔写真〕	176
fig. 269	出土錢貨（大保通寶）〔細部〕〔写真〕	177
fig. 270	出土錢貨（大保通寶）〔表〕〔写真〕	178
fig. 271	同〔裏〕〔写真〕	178
fig. 272	出土遺物（1）	179
fig. 273	出土遺物（2）	180
fig. 274	調査位置図	181
fig. 275	調査区設定図	181
fig. 276	I 区平面図	182
fig. 277	調査区全景〔写真〕	182
fig. 278	S B01平面図・断面図	183
fig. 279	S B02平面図・断面図	183
fig. 280	S B01〔写真〕	184
fig. 281	S B02 P-6 遺物出土状況〔写真〕	184
fig. 282	S B02 P-9 遺物出土状況〔写真〕	184
fig. 283	調査位置図	185
fig. 284	第2-1次 調査区全景〔写真〕	186
fig. 285	第2-1・2次 調査区平面図・断面図	187
fig. 286	第2-2次 調査区全景〔写真〕	188
fig. 287	第2-3次 調査区平面図	189
fig. 288	S T02〔写真〕	190
fig. 289	調査位置図	191
fig. 290	S E01 平面図・断面図・立面図	192
fig. 291	1区全景〔写真〕	193
fig. 292	S E01〔写真〕	193
fig. 293	1区・2区平面図	193
fig. 294	S X02〔写真〕	194
fig. 295	4区平面図	195
fig. 296	S K01・S D02 平面図・断面図	196
fig. 297	5区 平面図	196
fig. 298	S X01・S D01・04〔写真〕	197
fig. 299	5区 全景〔写真〕	197
fig. 300	6区-1 全景〔写真〕	198
fig. 301	6区-2 全景〔写真〕	199
fig. 302	6区-1・2 平面図	199
fig. 303	6区-1 硬治関係構造〔写真〕	200
fig. 304	6区-3・4 平面図	201
fig. 305	6区-4 全景〔写真〕	202
fig. 306	調査位置図	203
fig. 307	調査区平面図	204
fig. 308	I-1区 平面図・断面図	204
fig. 309	I-1区 遺物出土状況〔写真〕	204
fig. 310	調査位置図	205
fig. 311	II・III区 西壁断面図	205
fig. 312	II区全景〔写真〕	206
fig. 313	調査区平面図	207
fig. 314	S X03平面図・断面図	208
fig. 315	S K01平面図・断面図	208
fig. 316	S K11平面図・断面図	208
fig. 317	S X03・S K01・S K11〔写真〕	208
fig. 318	調査地遺址〔写真〕	209
fig. 319	出土遺物実測図	210
fig. 320	調査位置図	211
fig. 321	調査区平面図	212
fig. 322	調査区断面図	212
fig. 323	調査位置圖	213
fig. 324	調査区西壁断面図	213
fig. 325	第1~3造構面平面図	214
fig. 326	第4・5造構面平面図	215
fig. 327	III区第4造構面全景〔写真〕	215
fig. 328	S B01出土遺物〔写真〕	216
fig. 329	金銅製帶金具出土状態〔表〕〔写真〕	217
fig. 330	同左〔裏〕〔写真〕	217
fig. 331	同上 X線透過画像〔写真〕	217
fig. 332	同左 保存処理完了後〔写真〕	217
fig. 333	銅製紋具出土状態〔写真〕	218
fig. 334	同左 X線透過画像〔写真〕	218
fig. 335	同上 内部〔写真〕	218
fig. 336	同左 マクロ写真(4倍)〔写真〕	218
fig. 337	有機質顕微鏡写真(8倍)〔写真〕	218
fig. 338	同左(35倍)〔写真〕	218
fig. 339	刀子出土状況〔写真〕	219
fig. 340	同左 X線透過画像〔写真〕	219
fig. 341	保存処理完了後〔写真〕	219
fig. 342	精木質残存マクロ写真(2倍)〔写真〕	219
fig. 343	木質プレバーラート作成作業〔写真〕	219
fig. 344	同左(木口, 25倍)〔写真〕	219
fig. 345	同左(板目, 60倍)〔写真〕	219
fig. 346	板材出土状況〔写真〕	220
fig. 347	発泡ウレタンフォーム梱包〔写真〕	220
fig. 348	開梱作業〔写真〕	220
fig. 349	開梱後水洗作業〔写真〕	220
fig. 350	P E G含浸作業〔写真〕	221
fig. 351	真空凍結乾燥〔写真〕	221
fig. 352	保存処理完了後〔写真〕	221

I. 平成14年度 事業の概要

1. はじめに

平成14年度は阪神・淡路大震災の発生から8年目を迎え、震災復興区画整理事業などの震災復旧事業も軌道に乗り推進されつつある。震災時の埋蔵文化財行政の指針を示した国の「基本方針」の適用期間は平成12年度で終了したが、補助事業の適用対象が旧に復し、復旧・復興事業として被災者である個人及び、中小企業が建設する建物についてはこれまでどおり補助事業として採択している。

平成14年度においても新長田駅北地区や御所地区、松木地区において街区・街路整備が進み、住宅の建設等にかかる発掘調査も遅滞なく進捗した。また、昨年度調査を開始した鷹取第二地区、戎町遺跡の地域は、街区、宅地整備が開始され、届出件数の増加と発掘調査の件数が増加した。

開発指導の面では、平成11年6月より建築確認の事前届出制度における事前届出書の閲覧により、周知の埋蔵文化財附蔵地内の建築行為に対し、文化財保護法に基づく発掘届書の提出及び土木工事についての指導を徹底してきた。平成11年及び平成12年度の増加傾向にあった届出件数は、平成13年度からは、減少に転じ、平成14年度も引き続き減少し、神戸市内における建築確認申請の申請件数の減少と連動している。

このような建築件数の減少の背景には昨今の経済不況のかかわりがあるとも考えられる。このような状況の中で、平成13年度以降調査費用の負担が困難な個人・零細事業者の費用負担軽減の要望も高まり、このままの状態では十分な埋蔵文化財の保護が図りにくい事態となることが予測された。文化庁においても個人・零細事業者における発掘調査事業を積極的に補助事業として採択することを明確にしている。その採択基準は、都道府県で策定するものとなっていたが、兵庫県においては、この採択基準の策定がなされていなかったため、個人事業者・零細事業者の開発に伴う発掘調査に係る費用の一部を国庫補助事業として適用する神戸市の採択基準を設け、兵庫県教育委員会と協議した結果、平成14年6月1日から兵庫県で採択基準が設定されるまでの当分の間実施することとした。この補助制度により平成14年度では、個人事業者3件、零細事業者2件の発掘調査事業を行った。

2. 普及啓発

活動

出土資料の整理・収蔵・保存・公開の拠点である神戸市埋蔵文化財センターでは、常設展示室のほか収蔵展示室・遺物整理室の一部を公開している。また、企画展示や速報展示などを実施し、発掘調査の成果を公開している。平成14年度の一般入館者数は、22,654名であり、学校関係の入館者数は96校、7,309名であった。

企画展示

本年度は、3回の企画展示を開催した。春の企画展示『ドロだらけでなにしとん?』は、発掘調査から出土品の整理・保存処理、報告書作成、公開までの一連の埋蔵文化財保護の活動を紹介した。夏の企画展示『どこにあるの? 神戸の遺跡』では、身近にある遺跡がどのように発見され、発掘調査がなされるのか。また発掘調査から明らかになった神戸の歴史を紹介した。いずれも当市が行う埋蔵文化財保護行政の活動であるが、小・中学生を対象としたわかりやすい解説を行った。

秋の企画展示『古代の音色』展では、遺跡から出土する楽器に関する遺物の紹介を通し

て、古代人が楽器を作り出した背景や楽器、音楽に関する古代人の精神文化の一端に触れた展示を行った。期間中の10月20日には古代音楽研究家阿部遼氏の演奏会『古代琴の復元による演奏』を開催し、180名の聴講者があった。

展示会名称	開催期間	入館者数
『ドロだらけでなにしどん?』	H14. 4. 6～H14. 6. 16	11,121名
『どこにあるの? 神戸の遺跡』	H14. 7. 27～H14. 9. 8	2,436名
『古代の音色』	H14. 10. 5～H14. 11. 17	2,602名

学校展示 遺跡から出土した資料を子供たちが直接目を見て触れるながら、地域の歴史や文化を学ぶことを目的に、社会科教育の一環として平成10年度より市内小学校で展示会を開催している。展示は主に学校区内の埋蔵文化財の展示を行い、学芸員による展示開設も行っている。今年度は8校、9回の展示を実施した。

学校講座 出張学校考古学講座を社会科教育の一環として平成12年度より小・中学校を対象に実施

出張学校展示					
学校名	展示内容	展示期間	展示解説	受講人数	
兵庫大開小学校	掘ったらでてきた! 兵庫の歴史	5/8～5/28	5/20	101	
長坂小学校	むかしの伊川谷	5/28～6/7	6/6	174	
こうべ小学校	掘ってびっくり! 中央区	5/28～6/7	5/29	80	
若宮小学校	やよいじだいのくらし～すま～	6/4～6/28	6/12	61	
西山小学校	地面の下のお話	6/10～6/20	6/12	187	
伊川谷小学校	掘ってドキドキ! 伊川谷	6/24～7/5	6/21	160	
なぎさ小学校	しらべてみよう! むかしのくらし	7/8～7/24	7/15	50	
兵庫大開小学校	コンニチハ! やよい人で～す!	11/8～11/28			
若宮小学校	古代の須磨～大田町遺跡を中心として～	11/5～12/9	12/9	60	
展示解説受講者合計					873



fig. 4 企画展示『ドロだらけでなにしどん?』



fig. 5 『古代の音色』演奏会

している。ものづくりから古代の暮らしの工夫や技術を体験できる講座を開講している。

考古学講座 学校の休日の催しとして、体験学習を通じて先人の生活や技術を学ぶことのできる講座を、小学校高学年から高校生までを対象に開催した。

出張学校講座

講 座 名	開催日	学 校 名	受講数	講 座 名	開催日	学 校 名	受講数
勾玉づくり	4/23	鶴越小学校	42名	土器づくり	5/27	狩場台小学校	87名
勾玉づくり	4/26	兵庫大開小学校	187名	貫頭衣づくり	5/31	明親小学校	69名
勾玉づくり	4/30	伊川谷小学校	166名	土器づくり	6/3	竜が台小学校	41名
勾玉づくり	5/2	箕谷小学校	102名	勾玉づくり	6/6	美野丘小学校	62名
勾玉づくり	5/7	灘小学校	59名	土器づくり	6/11	摩耶小学校	57名
土器づくり	5/9	長板小学校	174名	土器づくり	6/13	宮本小学校	49名
勾玉づくり	5/10	御歳小学校	21名	勾玉づくり	6/25	春日野小学校	42名
土器づくり	5/16	小部小学校	102名	勾玉づくり	7/3	横尾小学校	107名
勾玉づくり	5/17	垂水小学校	42名	貫頭衣づくり	7/8	本山第2小学校	164名
土器づくり	5/20	小寺小学校	81名	勾玉づくり	7/11	なぎさ小学校	42名
ドングリクッキーづくり	5/23	鶴甲小学校	87名	石包丁づくり	9/13	雲雀丘中学校	22名
勾玉づくり	5/24	兵庫大開小学校	101名	ドングリクッキーづくり	2/14	宮本小学校	43名
出 張 学 校 講 座 合 计				開催学校数合計	24校	受講者数合計	1,952名

こどもたちの考古学講座

講 座 名	開催日	内 容	参加者
縄文のハッパを探そう	4/20	垂水・日向遺跡で採取した縄文時代中期の土から木葉を見つけ出し、フィルムに封入しその種類を調べる。	42名
勾玉をつくろう	7/20	印材で勾玉などの古代のアクセサリーをつくる。	192名
土器・埴輪をつくろう	8/3	自然乾燥で硬化する粘土で土器や埴輪をつくる。	163名
勾玉をつくろう	8/24	印材で勾玉などの古代のアクセサリーをつくる。	101名
石包丁をつくろう	8/31	滋賀県産高島石で石包丁などの磨製石器を作る。	100名
どんぐりで縄文クッキーをつくろう	12/11	ドングリ（シイの実）を粉にしてクッキーを焼く。	16名
合 計			614名

親子で『赤米作りに挑戦しよう』

講 座 名	開催日	内 容	参加者
貫頭衣をつくって田植えに挑戦	6/1	神出自然教育園の水田において、古代米である赤米を	96名
田んぼの草取りと石包丁づくり	7/13	田植えから収穫までを体験する。	81名
自分でつくった石包丁で収穫に挑戦	10/27		82名
合 計			259名

考古学講座			
講 座 名	開催日	内 容	受講人数
土器・埴輪・土笛をつくろう（形成）	11／17	粘土で土器を成形し、乾燥させる。	14名
土器・埴輪・土笛をつくろう（焼成）	12／1	乾燥させた土器を野焼きによって焼成する。	7名
勾玉・菅玉をつくる	2／23	印材の青田石や寿山石で勾玉・菅玉をつくる。	16名
		合 計	37名
		考古学講座・総合計	910名

出張公民館講座 夏休みの公民館事業として開催された小・中学生を対象とするサマースクールにおいて3館の公民館より依頼を受け、勾玉づくりの体験考古学講座を実施した。

出張公民館講座 子供のみ			
公民館名	講 座 名	開講日	受講人数
葺合公民館	サマースクール古代人に挑戦！～勾玉づくり～	8／7	33
東垂水公民館	サマースクール古代人に挑戦！～勾玉づくり～	8／9	65
玉津南公民館	サマースクール古代人に挑戦！～勾玉づくり～	8／28	29
	講 座 受 講 者 合 計		127

〔文化財保護強調週間の催し〕

文化財保護強調週間の催しとして、大歳山遺跡公園において11月2日（土）に『大歳山まつり』を開催した。垂水区と連携し、地域に残る文化財を活用し、日常の中に活かすことを地域の人々と考える試みとして、復元された堅穴住居の内部を公開するとともに、古代人の生活の一端を体験できるような催しを行った。古代人の生活体験では、舞錚による火起こしや杵・臼による米の脱穀、古代米の試食、古代衣装試着など行った。参加者は、500人であった。



fig. 6 考古学講座「土器・埴輪・土笛をつくろう」



fig. 7 公民館講座 サマースクール古代人に挑戦

(発掘調査現地説明会の開催と報道関係資料提供)

発掘調査及び出土遺物の整理において重要な発見があった場合、市役所内の市政記者クラブで発表を行っている。また、現地調査期間中であって安全管理上可能であれば現地説明会を開催している。また、要望があれば地域住民対象の説明会も開催している。本年度は、3件の現地説明会を開催した。

遺跡の公開				
遺 跡 名	開 催 日	内 容	見学者	
兵庫松本遺跡	平成14年9月9日	弥生時代前期・古墳時代前期の集落	248名	

記者発表と現地説明会				
遺跡名等	発 表 日	内 容	現地説明会開催日	見学者数
西求女塚古墳	平成14年8月12日	市役所市民ギャラリー『出土鏡レプリカ・パネル展示』の開催	平成14年8月7日 ～ 平成14年8月16日	752名
西求女塚古墳	平成14年9月27日	六甲勤労市民センター『パネル展示』の開催	平成14年10月2日 ～ 平成14年10月16日	900名
西求女塚古墳	平成14年9月27日	『西求女塚シンポジウム』の開催（王子動物園ホール）	平成14年10月19日	197名
兵庫津遺跡 柳原惣門跡	平成14年10月4日	西国街道から兵庫津に入る西の門「柳原惣門」の遺構を検出。	平成14年10月6日	180名
西求女塚古墳	平成14年9月9日	後方部北側のくびれ部の検出	平成14年11月3日	60名
小路大町遺跡	平成15年1月23日	保存状態の良好な奈良時代の馬鏡の発見		

(資料の貸出) 出土品を適正に広く公開し、活用するための平成13年4月に『所蔵資料の貸出し基準』を制定し、幅広い埋蔵文化財の活用を行っている。企画展示や資料調査のための考古資料の貸出しは、4件、81点（土器・瓦等74点・石製品1点・金属製品4点・遺構切取り資料2点）あった。写真資料の貸出しは、35件、122点であり、企画展示のパネル作成や展示図録・書籍・教科書資料集・観光ガイドブック・文化財保護行政普及パンフレットの掲載など、幅広く活用されている。

(所蔵資料の特別利用)

研究機関や研究者の研究活動のための考古資料の熟覧や実測、写真撮影などの所蔵資料の特別利用は21件あった。



fig. 8 大歳山まつり



fig. 9 現地説明会（柳原忠門）

[埋蔵文化財センターの施設見学]

埋蔵文化財センターの遺物整理室、特別収蔵庫、記録収蔵室、写場、保存処理施設や設備の見学は2件、学校教育の課外活動としての施設見学が3件あり、依頼に基づき普段は公開していない施設も公開している。

[刊行物]

平成14年度の刊行物は以下の10点である。

(1) 平成12年度 神戸市埋蔵文化財年報	平成15年3月 発行	額価1,500円
(2) 新方遺跡 野手・西方地区発掘調査報告書Ⅰ	平成15年3月 発行	額価2,900円
(3) 熊内遺跡 第3次発掘調査報告書	平成15年3月 発行	額価2,600円
(4) 今池尻遺跡 新方遺跡平松地点 発掘調査報告書	平成15年3月 発行	額価4,500円
(5) 大手町遺跡 第1～4・6次発掘調査報告書	平成15年3月 発行	額価1,800円
(6) 御蔵遺跡V 発掘調査報告書	平成15年3月 発行	額価2,100円
(7) 御蔵遺跡第5・7・11～13・18～22・24・28・29・31・33～36・41・43次発掘調査報告書	平成15年4月 発行	額価1,500円
(8) 松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次発掘調査報告書	平成14年10月 発行	額価1,000円
(9) 企画展示図録『古代の音色』	平成14年10月 発行	額価 200円
(10) 神戸市埋蔵文化財分布図	平成15年3月 発行	額価 800円

[シンポジウム「西求女塚古墳はこうしてつくられた」の開催]

国の史跡指定候補となっている西求女塚古墳は、平成4年度から継続的な確認調査を行ってきた。これまでの調査で明らかとなった事実を様々な角度から検討し、その成果を調査報告書に取りまとめ、歴史的、学術的な評価を行うことを目的としたシンポジウムを10月19日に開催した。また、シンポジウム開催の関連事業としてパネル展示や出土鏡のレプリカ展を開催した。開催内容は、下の別表のとおりである。

展示会名称	開催期間	開催場所	見学者数
西求女塚古墳パネル・出土鏡レプリカ展	H14. 8. 7～8. 16	市役所1号館市民ギャラリー	752名
西求女塚古墳パネル展	H14. 10. 2～10. 16	六甲勤労市民センター	900名
西求女塚古墳シンポジウム	H14. 10. 19	王子動物園ホール	197名

〔太閤湯殿館開館3周年記念事業講演会の開催〕

北区有馬町の有馬温泉内に所在する太閤の湯殿館は、阪神・淡路大震災により被害を受けた極楽寺庫裏の再建に伴い平成8年から平成10年度に行った発掘調査で出土した岩風呂遺構や庭園等の一部を露出展示した資料館として平成12年度に開館している。

平成14年7月7日から7月14日の間、開館3周年記念行事が念佛寺において行われ、期間中の7月8日には京都大学学院助教授山岸常人氏の講演会「中世の風呂（湯屋）について」を、7月11日には茶道資料館学芸部長赤沼多佳氏の講演会「桃山の茶陶について」が開催された。

4. 開発指導

平成14年度の文化財保護法に基づく届出・通知についての件数は別表のとおりである。平成11年度より開始された『神戸市民の住環境をまもりそだてる条例』に基づく事前届出制度における事前届出書の閲覧により、発掘届の提出及び土木工事についての指導を徹底してきた。以来、届出・通知件数は増加の傾向にあったが、平成13年度からは減少に転じ、今年度においても前年度比約1割の減少となった。神戸市内における建築確認申請の申請件数の減少に連動するような動きをみせてている。

本市では便宜上、阪神・淡路大震災に起因する復旧・復興事業関連開発とそれに起因しない通常事業関連開発を区別し処理している。復旧・復興事業に関しては平成11年度をピークとし、平成12年度以降は減少している。これまで復興区画整理事業地以外での復旧・復興事業が大半を占めていたが、平成14年度においては、復興区画整理事業地内の届出件数が7割を占めるようになり、復旧・復興事業が復興区画整理事業地内に集約される傾向がみられる。なお、開発行為事前審査各種申請は、前年と比べ20件の増加、試掘調査件数は、12件の減少となっている。

また、埋蔵文化財発掘調査の届出（文化財保護法第57条の1）は2件あった。そのうち北区道場町塩田字南所所在の南所3号墳は、保存目的の学術調査で兵庫県教育委員会及び神戸市教育委員会の指導の下、大手前大学史学研究所が石室及び墳丘の確認調査を行った。その結果、県下で最古級の6世紀前半の横穴式石室であることが明らかとなった。調査期間中の9月7日には、現地説明会が開催された。

5. 調査事業

平成14年度の発掘調査事業は、民間事業関連のすべて・公共事業関連の調査の一部及び補助事業の大部分については教育委員会が実施し、公共事業関連の調査の大部分と補助事業の一部を（財）神戸市体育協会に委託して実施した。

全体の調査件数及び発掘調査面積は別表のとおりである。平成13年度と比較すると調査件数は、8件減少し、調査面積は約4割減少している。

調査面積を個別に見ると、100m²以下のものが、全体の約4割を占めており、500m²以下のものが全体の4割以上を占めており、前年度とほぼ同じく小規模な発掘調査が主になっている傾向にある。今年度に発掘調査を要した総費用は506,115千円である。

復興事業

震災から8年目を迎えた復興事業に伴う発掘調査は、前年度より14%減少の57件であった。復興事業は、平成7年度開始以来、平成9年度をピークに徐々に減少し、本年度では、最も少ない調査件数となった。その内訳は、個人及び中小企業事業者による国庫補助事業は39件で、大企業及び公共の事業者の経営負担による受託事業は18件である。

国庫補助事業 国庫補助事業は120,000千円で、内訳は緊急目的の個人住宅等各種開発事業に伴う事前調査である試掘・確認調査が21,587千円、圃場整備事業に伴う試掘・確認調査が1,390千円、遺跡の保存目的の範囲確認調査（西求女塚古墳・白水瓢塚古墳・端谷城跡・兵庫津遺跡柳原惣門跡・舞子古墳群）22,757千円、圃場整備事業に伴う発掘調査が3件・2,328千円、個人住宅及び中小企業の発掘調査が30件・58,795千円（内訳：復興事業29件：57,958千円・通常事業1件：837千円　その内事業種別では個人住宅等：25件・50,655千円、個人事業：3件・5,231千円、零細事業者：2件・2,909千円）、報告書作成のための整理・報告書の作成等は9,290千円、遺跡地図作成等は3,642千円、その他の経費211千円である。

保存目的調査 国または県、市指定史跡を目指し保存活用を図ろうとする遺跡、埋蔵文化財を核としてまちづくりに活用しようとする遺跡について、範囲確認調査を実施している。

国史跡指定の候補となっている西求女塚古墳では、調査の結果、後方部北側くびれ部と後方部北東コーナー部分が確認されたことによって、後方部の規模や形状の復元のデータを得ることができた。

兵庫区に所在する柳原惣門（兵庫津遺跡内）は、西国街道から兵庫津に入る西の入口に立てられた門である。兵庫区民まちづくり協議会と兵庫区では、協働による失われた史跡等の復元によりまちの活性化を図ることをテーマに、柳原惣門を核としたまちづくりの取り組みが計画された。教育委員会文化財課では、惣門跡の遺構の保存・保護を図るために資料を得る目的から確認調査を実施した。推定地にあたる柳原蛭子神社の境内において、確認調査を実施した結果、惣門の柱跡と考えられる遺構が検出された。

白水瓢塚古墳は、西区伊川谷町潤和字シンド山に所在する古墳時代前期の前方後円墳で、昭和61年度以降、8次の調査が行われており、今後の活用を検討している。今年度は、前年度に発見された前方部墳頂部の埋蔵施設である粘土櫛の検出作業を行った。

西区櫻谷町寺谷では端谷城址を活かした里づくり計画が策定され、住民とボランティア、行政による環境保全などの協働作業を行うとともに、確認調査を実施している。今年度は、二の丸と三の丸間の堀跡を中心とした確認調査を実施した。

整理事業 主な整理事業として、史跡五色塚古墳出土埴輪等の整理事業を本年度から開始した。未整理であった埴輪等の出土資料や調査時の資料の整理を行い、その成果を広く公開するため、整備報告書を刊行する。整理事業は平成16年度までの3ヵ年計画で、平成17年度には報告書を刊行する予定である。

文化財保護法に基づく届出・通知、試掘依頼等

発掘調査、整理作業件数一覧

No.	内 容	件 数
1	発見、発掘届・通知	624件
i	調査のための発掘届(57条第1項)	2件
	民間事業に伴う発掘届(57-2)	574件
	通常事業関連	478件
	復興事業関連	96件
ii	公共事業に伴う発掘通知(57-3)	48件
	通常事業関連	39件
	復興事業関連	9件
iii	発見届・発見通知(57-3・6)	0件
2	発掘調査の報告(保没法58条2)	38件
3	開発行為事前審査等各種申請	150件
4	試掘調査(依頼件数)	283件
i	通常事業関連	31件
	通常公共関連	8件
	通常民間関連	23件
ii	復興事業関連	252件
	復興公共関連	78件
	復興民間関連	174件
5	工事立会	31件

No.	内 容	件 数
1	発掘調査(大規模確認調査も含む)	77件
i	公共事業に伴う発掘調査	27件
	通常事業関連	9件
	復興事業関連	18件
ii	民間事業に伴う発掘調査	50件
	通常事業関連	11件
	復興事業関連	39件
iii	現場整備事業に伴う発掘調査	7件
2	整理作業(復興調査整理作業を含む)	4件

発掘調査面積(単位: m²)

	公共事業関連	民間事業関連	計	延べ調査面積
通常事業	4,939	6,749	11,688	13,960
復興事業補助事業	0	2,992	2,992	4,513
復興事業受託事業	6,134	210	6,344	9,942
計	11,073	9,951	21,024	28,415

発掘調査面積別件数

調査面積	件 数	調査面積	件 数
~ 100m ²	33	1,001 ~ 2,000m ²	2
101 ~ 300m ²	29	2,001 ~ 5,000m ²	2
301 ~ 500m ²	5	5,001m ² 以上	0
501 ~ 1,000m ²	6	合 計	77

平成14年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）(1)

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積		調査期間	調査内容	調査原因
					既存面積	追加面積			
1	海南町造跡 第1次調査	芦屋区森南町2丁目 14-10番	神戸市教育委員会	黒田良平	172af	14.10.02~14.12.13	弥生時代中期の水路（浮木施設）、 小世の羅立柱塩分・水溜土坑・石組井戸。	区画整理	
2	出口通路 第6次調査	芦屋区森北町3丁目 17番3	神戸市教育委員会	黒田昌正	240af	15.06.11~14.07.30	遺構面は1ha。古墳時代の植物、縄文時代の木・共同住宅 構造、砾立柱植物などを確認。	共同住宅 (国庫補助事業)	
3	出口通路 第7次調査	芦屋区本山北町1 40-1	神戸市教育委員会	中野さやか	42af	14.06.12~14.06.14	遺跡の縁辺部と考えられ、内食層がほとんどなく、遺構の存在も有難。	個人住宅 (国庫補助事業)	
4	同本山林古墳 第1次調査*	東灘区向日町6丁目 15-1, 15-3, 15-4	神戸市教育委員会	山口英正	110af	14.06.02~14.10.24	横穴式石室1基と弥生時代の墓穴石器1種を検出。	個人住宅 (国庫補助事業)	
5	御家庄塚 第10次調査	東灘区南陽町御影 半谷ノ前144番6号 御影1丁目1363番7	神戸市教育委員会	西谷誠吾	130af	14.05.23~14.06.06	弥生時代後葉～庄内型の墨穴住居（端に苔あわり）。 古道など。	個人住宅 (国庫補助事業)	
6	御影古墳跡群 第1次調査	東灘区御影木町 728-1, ?	神戸市教育委員会	川端 伸	40af	15.02.26~15.03.10	近世の荒廃が激しく、古窯跡に虚無地びく付 高層は検出されていない。	店舗 (国庫補助事業)	
7	西家女塚古墳 第10次調査	海浜区御池3丁目	神戸市教育委員会	安田 雄・ 中谷 康	220af	14.07.06~14.11.26	後方部の形跡確定。	沿岸整備 (国庫補助事業)	
8	雲井通路 第14-1・2次調査*	中央区旭洋3丁目 560-4番・旭町2 丁目381-382	神戸市体育協会	石畠二仁	130af	14.07.22~14.08.17	為生時代以前の祭祀遺構（壇）／弥生時代中期 の大型円形空穴住居を検出。	市営施設	
9	児井通路 第15次調査	中央区旭洋2丁目 390	神戸市教育委員会	浅谷誠介	30af	14.07.25~14.08.02	児井通路の東側部に位置し、道路・建物とともに 整めて有様。	個人住宅 (国庫補助事業)	
10	葛井塚跡 第16次調査	中央区旭洋5丁目 312番地、315番地	神戸市教育委員会	阿部敬生	55af	14.08.26~14.09.09	遺構面1ha。第1面では弥生時代初期のピット・ 土坑。第2面では瓦ら込み・ピット。鶴文時代 と考えられる。第3・4面では少量化の土器片と サマカイト片出土。	社屋再建 (国庫補助事業)	
11	雲井通路 第17次調査	中央区旭洋3丁目 17-1, 17-2, 17-3, 51, 52	神戸市教育委員会	中野さやか	212af	15.08.03~15.04.14	第1面は、遺構面（ピット）からの須恵器より 古墳時代後葉、第2面では土坑・ピットを検出、 時期不定。第3面は弥生時代前期の土坑、ピッ トを検出。	共同住宅 (国庫補助事業)	
12	吉岡城跡	中央区北長崎通6- 4 27	神戸市教育委員会	佐伯二郎・ 横尾尚子	18af	14.11.20~14.11.21	遺構面は3面。第1面は中世のピットを検出し、 第2面・第3面は慶文天羽羽の瓦ら込み・遺構が 検出されサマカイト片と瓦板十数枚が出土。	共同住宅 (国庫補助事業)	
13	児井通路 第20次調査	中央区北長崎町5 丁目20	神戸市教育委員会	須藤 宏	75af	14.08.29~14.10.16	須藤焼の豆州本村と持株の遺石倒錠。	須藤焼 (国庫補助事業)	
14	丸島岸造跡 第20次調査	丸島区庄町3丁目 19	神戸市教育委員会	宿麻 実	20af	15.01.29~15.02.14	遺構面に5面露山された。18世紀を中心とする 町屋跡遺構。	個人住宅 (国庫補助事業)	
15	辰井津遺跡 第31次調査	兵庫区切戸町1	神戸市教育委員会	阿部 功	187af	15.03.04~15.05.20	5面露山。第1面は近世後葉の水路。第2・ 3面は慶文時代で、酒・土坑・ピットなどを検出。 不明確であった時頃の遺構が検出された感 度は大きい。	共同住宅 (国庫補助事業)	

平成14年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（2）

No.	地名	所在地	調査主体	調査担当者 延べ全面調査	調査面積 m ²	調査期間	調査内容	調査原因
16	兵庫松本道路 第11次調査	兵庫区松本通2丁目 相生町2-3番号11	神戸市教育委員会	中谷さやか	22m ² 22m ²	14.05.34～14.06.29	遺物多く、遺構・遺物確認できず。	個人住宅 〔廻廊補助事業〕
17	兵庫松本道路 第12次調査	兵庫区松本通2丁目	神戸市教育委員会	山口恭花・ 中谷 正	285m ² 835m ²	14.06.07～14.09.13	先史時代灰窯・古墳時代初期初めの遺構・遺物を確認。	区画整理
18	兵庫松本道路 第13次調査	兵庫区松本通2丁目 2-4番地(1, 22番号)	神戸市教育委員会	中谷 正	40m ² 40m ²	14.06.26～14.09.06	南北方向の先史時代灰窯の痕跡。	共同住宅 〔廻廊補助事業〕
19	兵庫松本道路 第14次調査	兵庫区松本通2丁目 2-4番地(1, 22番号)	神戸市教育委員会	中谷 正	50m ² 50m ²	14.09.11～14.09.13	先史時代前期から古墳時代前期初めの集落と說路を確認。	共同住宅 〔廻廊補助事業〕
20	兵庫松本道路 第15次調査	兵庫区松本通2丁目 6-8, 6-9	神戸市教育委員会	中谷 正	25m ² 25m ²	14.09.11～14.09.13	新石器時代後期～先史時代初期の施設の西部分を検出。	個人住宅 〔廻廊補助事業〕
21	兵庫松本道路 第16次調査	兵庫区松本通2丁目 2-3 (1), 3-3 (2)	神戸市教育委員会	石島三和	56m ² 112m ²	14.10.30～14.11.21	先史時代後期と古墳時代初期の2箇の遺構が検出された。第2遺構前の獨立柱跡は、1×2間以下の規模。	店舗・工場付住宅 〔廻廊補助事業〕
22	上北道路 第48次調査	兵庫区上北通8丁目 101 3, 101 22	神戸市教育委員会	川上泰志	300m ² 300m ²	14.05.30～14.06.28	先史時代後期の虎・平安時代後半の井戸1基など。	共同住宅 〔廻廊補助事業〕
23	上北道路 第49次調査	兵庫区上北通8丁目 106 2	神戸市教育委員会	川上泰志	97m ² 201m ²	14.07.09～14.08.07	古墳時代あるいは中世の遺構を確認。	市有地定期
24	上北道路 第50次調査	兵庫区松本通8丁目	神戸市教育委員会	谷 正毅・ 阿部 动	370m ² 370m ²	14.10.09～14.12.06	弥生時代後期の墓・流路・ピット・土器群、古墳時代後期の土坑。	道路
25	上北道路 第51次調査	兵庫区上北通8丁目 11 1 (横畠) (横 地盤) 8丁目(6 2)	神戸市教育委員会	黒田泰正	150m ² 413m ²	15.01.15～15.03.25	遺構第4面、第1面は平安時代の井穴。第2面は古墳時代後期第一回柱付切妻の施設(柱穴1軒・柱跡3箇所)から、第3面は古墳時代後期の溝。第4面は平安時代後期の溝。	共同住宅 〔廻廊補助事業〕
26	由羅清掃 第50次調査	長田区由羅通6丁目 1番地(1)	神戸市体育協会	西岡久次・ 山口英正	300m ² 450m ²	14.05.13～14.12.06	古墳時代後期の穴住まい、飛鳥時代～奈良時代の柱穴や窓、中の獨立柱跡等。	土地区域整理
27	由羅清掃 第51-1, 51-2 次調査	長田区由羅通4・5 丁目、菅原通3丁目	神戸市体育協会	谷 正毅・ 池田 肇	406m ² 406m ²	14.08.26～14.10.18	飛鳥時代の流路・樹・発石遺構、小糞・平安時代の住穴・溝 全合計出土11	道路(国営28号) 通路
28	水笠通跡 第22次調査	長田区水笠通3丁目 9 (供地) 18街区3 2	神戸市教育委員会	石島三和	202m ² 202m ²	14.05.14～14.05.25	遺構の保存状況が悪く、瓦状構造1条が検出されたなどとする。	個人住宅 〔廻廊補助事業〕
29	水笠通跡 第23次調査	長田区水笠通3丁目	神戸市教育委員会	石島二和	18m ² 18m ²	11.05.29～11.06.03	流路不算の溝1条。	個人住宅 〔廻廊補助事業〕
30	水笠通跡 第24次調査	長田区水笠通3丁目	神戸市体育協会	石島三和	97m ² 92m ²	14.06.06～14.06.15	近現代の耕作土のみ。	上耕X耕耙程

平成14年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）(3)

No.	通 路 名	所 在 地	調査主体	調査担当者	調査面積 延面積面積	調査期間	調査内 容	調査原 因
31	水笠路 第25次調査	兵庫区水笠通3丁目 3-4、5-7、8-9、 9(水笠通5丁目13 街区、18、19号等)	神戸市教育委員会	石島三和	50af 50af	14. 9. 18～14. 06. 24	高床迷籠1基を検出。	個人住宅 (国庫補助事業)
32	二路町通跡 第16次調査	兵庫区久保町6丁目	神戸市体育協会	谷 正徳・ 川上誠志	2,700af 2,700af	14. 01. 26～15. 02. 21	平安時代末～鎌倉時代の埋立地物や牛時代の 市街地再開発事業	
33	西松町通跡 第1次調査	長田区野町4丁目 12番	神戸市教育委員会	石島三和	65af 65af	15. 01. 21～15. 01. 28	中世集落の一郭	古墳・工場付近で (国庫補助事業)
34	船町通跡 第33次調査	須磨区常盤町1丁目	神戸市体育協会	川原 格・ 夜谷誠喜	90af 90af	14. 04. 15～14. 08. 27	弥生時代中期の方形周溝墓	土地の内務課
35	松原通跡 第34次調査	長田区松原町4丁目	神戸市体育協会	山口英正・ 油谷 敏	45af 45af	15. 01. 30～15. 03. 11	古墳時代後期の圓柱性穴などを検出。 遺構密度は低い	土地の内務課
36	松原通跡 第35次調査	長田区松原町4丁目 10-2・8-4	神戸市教育委員会	山口英正	100af 120af	15. 01. 30～15. 02. 27	古墳時代の酒・柱穴などとともに、弥生初期の 本格墓が検出された。遺構の現存状況は悪い。	個人住宅 (国庫補助事業)
37	松野通跡 第36次調査	長田区松野町4丁目 10-1、10-4(東長田 駅北地区33-1街区1 町引)	神戸市教育委員会	山口英正	120af 120af	15. 01. 30～15. 02. 07	古墳時代の酒・柱穴などとともに弥生初期の大 棺墓1基が検出された。遺構の現存状況は悪い。	個人住宅 (国庫補助事業)
38	松野通跡 第37次調査	長田区松野町4丁目 須磨区31-1号53- 4-(6)	神戸市教育委員会 須磨区31-1号53- 4-(6)	須磨 勇・ 山口英正	70af 70af	15. 03. 26～15. 04. 11	一部で中世周溝墓と古墳時代の透脚台形墓が 検出された。	店舗・工場付近
39	戎町通跡 第37次調査	須磨区寺町2丁目 6街区6号付	神戸市教育委員会	阿部 功	100af 200af	14. 04. 04～14. 04. 16	遺構断2箇、弥生時代中期の土坑・落ち込み、 弥生時代中期後半の溝・土坑・ピット	個人住宅 (国庫補助事業)
40	戎町通跡 第38次調査	須磨区寺町1・2 丁目	神戸市体育協会	丘原 格・ 西田尚史・ 石原 和也・ 山口英正	700af 800af	14. 05. 15～15. 03. 11	弥生時代中期の方形周溝墓が確認され、耕作域 と墓域の区別ができるようになった。	土地の内務課
41	戎町通跡 第39次調査	須磨区大田町2丁目 37-1	神戸市教育委員会	小谷 正	24af 48af	14. 05. 27～14. 06. 06	弥生時代中期立柱地物・ピット、弥生時代後 期ピット、中世耕作痕1箇を確認。	個人住宅 (国庫補助事業)
42	戎町通跡 第40次調査	須磨区寺町1丁目 4、22、23(5-3街区 3-7)	神戸市教育委員会	井尻 格	20af 20af	14. 07. 16～14. 07. 24	遺構跡7箇を検出した。遺構内から少量の土 器が出土したが、時期を決定できなかった。	個人住宅 (国庫補助事業)
43	戎町通跡 第41次調査	須磨区寺町2丁目 45、46、62、63	神戸市教育委員会	西田尚史・ 川上厚志	64af 128af	14. 07. 23～14. 08. 15	第1面では弥生時代中期後半の落穴1箇、 第2面では中世の10紙。	社屋跡 (国庫補助事業)
44	戎町通跡 第42次調査	須磨区寺町2丁目 92、96-8街区1- 3	神戸市教育委員会	浅谷誠苔	15af 15af	14. 08. 28～14. 09. 02	中世接跡1箇のみ。	個人住宅 (国庫補助事業)
45	戎町通跡 第43次調査	須磨区寺町2丁目 6-1街区13、14	神戸市教育委員会	須藤 宏	45af 135af	14. 11. 13～14. 12. 04	中世と弥生時代中期2面の計3次の遺構跡。 弥生時代の溝・土坑を確認。平面形から方形周溝 墓。第3遺構面は土坑・柱穴・平地式住居?。	集会所 (国庫補助事業)

平成14年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（復興事業に伴う調査）（4）

No.	地 脚 名	所 在 地	調査主 体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調 査 内 容	調査原因
46	舞子古墳群舞子台支群3号墳 第19次調査	東灘区舞子3丁目	神戸市教育委員会	若林 宏	65m ² 65m ²	14.05.09～14.06.28	舞子古墳群舞子台支群3号墳の自然崩落の後旧	遺跡整備 (国庫補助事業)
47	福住遺跡 第2次調査	西区押部谷町福住字 岡木14番地、451番、 451番2、451番3、 451番4	神戸市教育委員会	阿部恵生	95m ² 95m ²	14.06.10～14.06.28	中世の各立ち込み以外に、古物時代後期窪穴住・柱穴を挟山。	個人住宅 (国庫補助事業)
48	水谷遺跡 第9次調査	西区水谷町水谷字大 谷4丁目(近傍地) 西区中島町中島字中島 1～4(近傍地)	神戸市教育委員会	河原 功	234m ² 234m ²	15.01.22～15.02.12	昭和初期の鍛錬と古墳時代のピットを確認。	共同住宅、飲食店、物販店 (国庫補助事業)
49	雄谷城跡 第3次調査	西区雄谷町雄谷字北 谷902-10	神戸市教育委員会	谷 正俊	117m ² 117m ²	15.03.12～15.03.26	二ノ丸～三ノ丸間の柵塀、小曲塀、二ノ丸先端 壁遺。	遺跡整備 (国庫補助事業)
50	寺谷地区	内久崎名町寺谷字平 地 大之 他	神戸市教育委員会	中間さやか	46m ² 46m ²	14.10.29～14.10.30	試掘調査。文化財は確認されていない。	巡回整備 (国庫補助事業)
51	白水塗跡古墳 第9～10次調査	西区伊川谷町白水塗 シント山	神戸市教育委員会	千種 浩、 中村大介、 安田 浩	57m ² 57m ²	14.06.19～14.07.05	前方部埋葬施設内赤色顔料の調査	遺跡整備 (国庫補助事業)
52	今津遺跡 第15次調査	西区今津町今津字石 羽350-1、550-2の 部	神戸市教育委員会	阿部恵生	50m ² 100m ²	14.12.09～14.12.25	第1遺跡面では、溝状遺構2条、土坑2基、不 規則な柱穴が認められた。調査範囲を拡張して川手付 近傍の今津の元町通りの北側で、柱穴が認められた。 第2遺跡面では、副室付の堆積「から多量の 弥生時代中期の土器が出土した。」	宅地造成 (国庫補助事業)

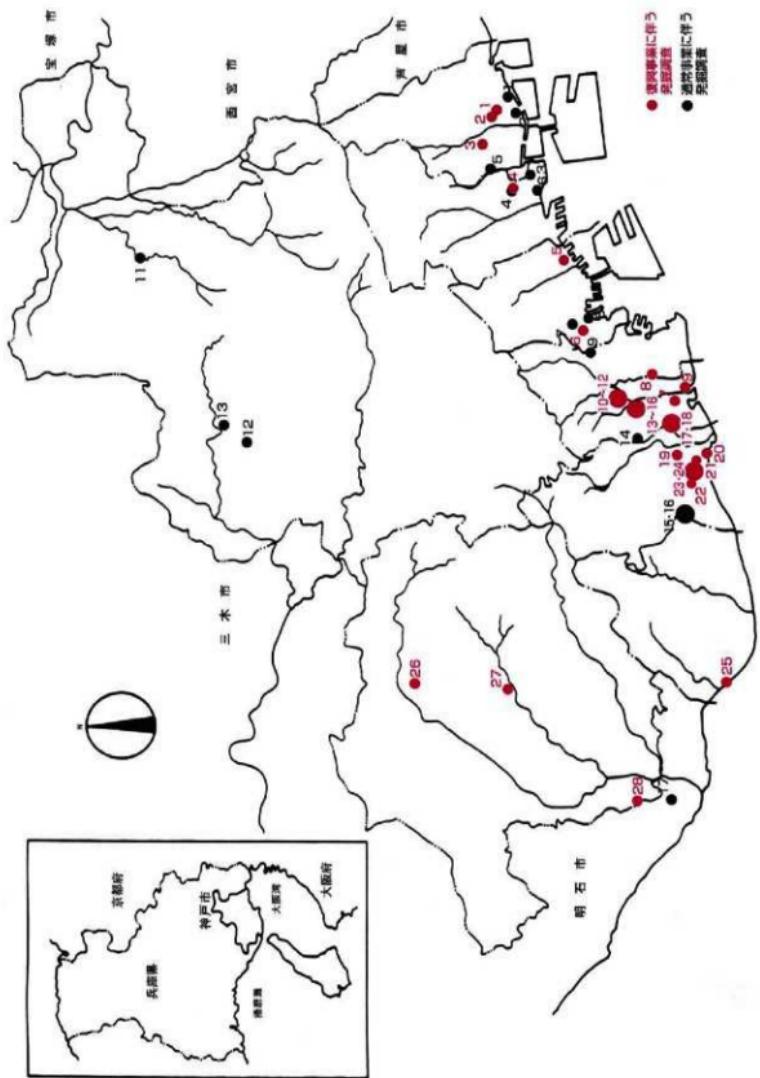
平成14年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）(1)

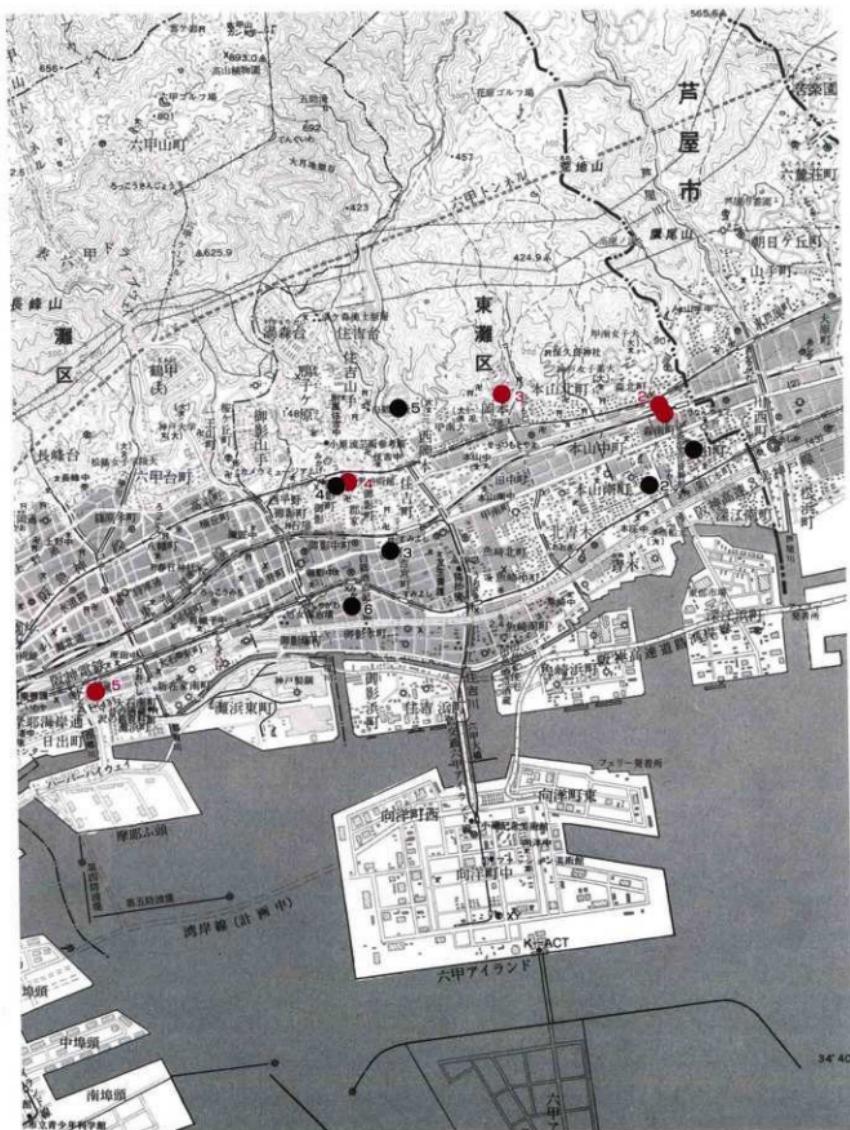
No.	調査名	所在地	実施主体	調査担当者	調査面積 延べ面積	調査期間	調査内容	調査年回
1	本庄町造跡 第9次調査	東灘区本庄町2丁目 123	神戸市教育委員会	中原さやか	2,250㎡ 3,250㎡	14. 08. 20～14. 10. 23	弥生時代後期の堅穴住居・墓を確認。	共同住宅
2	小路大寺跡 第4次調査	東灘区本山南町1丁目 49番	神戸市教育委員会	月見 純	1,100㎡ 1,100㎡	15. 11. 26～15. 02. 03	高床花ら込み内に建築部材の墨縁と柱頭を検出。 馬鹿山土塁の下層には不整形の上杭が突出され、中からカニュウラン製器2件と土器破片を確認。	共同住宅 共同防災 共同防災
3	住吉町造跡 第3次調査	東灘区住吉町6丁目 186	神戸市教育委員会	井川 康	900㎡ 1,200㎡	14. 09. 09～14. 11. 21	北平区に海防施設。平安時代の堅立柱建物・堆土を確認。区内に古井戸の遺物を含む。	共同住宅
4	那家跡跡 第7次調査	東灘区那家町御影城 之前151番1	神戸市教育委員会	浅谷誠基	200㎡ 200㎡	14. 07. 01～14. 07. 25	古墳時代後期の堅穴住居・法・土坑・ピット	共同住宅 共同防災 共同防災
5	古岡木津跡 第5次調査	東灘区西岡本6丁目 10	神戸市教育委員会	浅谷誠基	90㎡ 90㎡	14. 09. 06～14. 09. 24	平安時代の柱穴・土坑を確認。	ガス・電気・水道
6	御影古古墳 第1次調査	東灘区御影本町725 1, 2	神戸市教育委員会	月見 純	140㎡ 140㎡	15. 02. 20～15. 03. 05	江戸時代末の石垣裏、時期不詳の磨石建物。	店舗
7	二宮跡跡 第2次調査	中央区二宮町2丁目 374, 375, 376, 377, 378	神戸市教育委員会	石原 一和	320㎡ 320㎡	15. 02. 14～15. 03. 20	7世紀と13世紀の古墳を検出。	共同住宅
8	難波跡 第16-2次調査	中央区難波5丁目 312番, 313番	神戸市教育委員会	河野敏生	400㎡ 400㎡	14. 11. 18～14. 12. 03	春作時代前半の上杭、弥生時代中期の土器(方形 埴輪底)、平安時代後期の堅立柱建物。	社屋西側
9	中山手西造跡 第2次調査	中央区中山手通5丁目 18番17	神戸市教育委員会	中原さやか	258㎡ 258㎡	15. 02. 19～15. 03. 04	古墳時代の堅立柱建物(1×2)が1棟や法、大同住宅 ピット。	共同住宅
10	兵庫市造跡 第34次調査 (現行実務)	兵庫区	神戸市教育委員会	千種 浩 中村大介 中原さやか	0㎡ 0㎡	14. 03. 01～14. 12. 27	出土遺物整理	
11	兵庫市造跡 第35次調査 (現行実務)	兵庫区	神戸市教育委員会	平林 浩 中村大介	0㎡ 0㎡	14. 04. 01～14. 06. 30	木製品・金属器を中心とした出土遺物整理	
12	兵庫市造跡 第36次調査	兵庫区須佐通1丁目 12	神戸市教育委員会	中原さやか	82㎡ 64㎡	14. 06. 08～14. 06. 07	現在の地盤調査以前の兵庫本駄の消費状況。	個人住宅 共同防災
13	口下部跡	北区立場町口下淮 西大久保1001, 口下 部立場1002-1	神戸市教育委員会	河野敏生	300㎡ 350㎡	14. 07. 22～14. 08. 09	弥生時代後期～古墳時代前期初めの堅穴住居 (造火生跡)、平安時代後期の堅立柱建物。	共同住宅 共同防災
14	ト二郎跡跡	北区有司町二郎字櫛 音～李丸	神戸市教育委員会	山田英正	135㎡ 135㎡	14. 12. 24～15. 01. 28	遺構は全体的に削平され、平安時代後期の構 造を確認したに止まる。	道路
15	山田・中池跡	北区山田町中	神戸市体育協会	河野敏生	240㎡ 240㎡	14. 05. 09～14. 05. 28	中古のピットを確認。	ガス・電気・水道

平成14年度埋蔵文化財発掘調査一覧表（通常事業に伴う調査）（2）

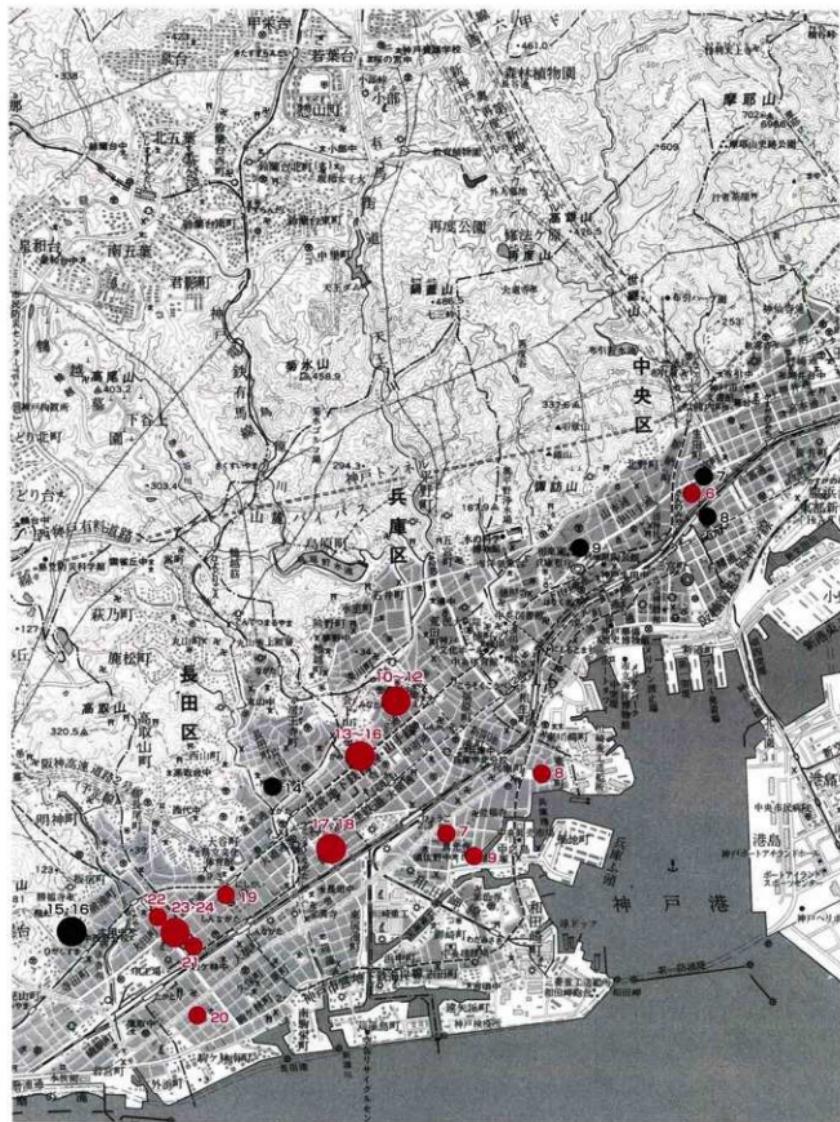
No.	道路名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延面積面積	調査期間	調査内容	調査原因
16	野瀬道路 第2次調査	北区淡河町野瀬字川合1223丁、1238	神戸市教育委員会	西岡巧次・ 中谷正	852㎡ 852㎡	14.11.19～15.03.20	平安時代後期の柱立社物・棒・木構造などを確認。	開発事業
17	野瀬北道跡 第1次調査	北区淡河町野瀬	神戸市教育委員会	阿部敏生・ 浅谷誠司・ 山本雅和	1,570㎡ 1,570㎡	15.01.08～15.03.31	中世後期～近世の礎石建物・石垣井戸・船立柱等。	開発事業
18	長田北洋社内 道路 第15次調査	長田区大桜町2丁目 1-1	神戸市教育委員会	石原二和	73㎡ 73㎡	14.05.26～14.07.12	南北方向の赤瓦時代後半の瓦窯。建設遺構での古墳時代前後の土器群を確認。（水系の祭祀）	丸岡山宅 (別屋施設事業)
19	大学の通路 第7次調査	同上	神戸市教育委員会	中田さやか	809㎡ 809㎡	14.06.21～15.07.31	弥生時代中期～後期の遺構。通路が西方に走ることが確認された。	宅地造成
20	人手町通跡 第8次調査	兵庫区人手町4丁目 14	神戸市教育委員会	阿部功	100㎡ 100㎡	15.02.17～15.02.24	弥生時代～古墳時代初期の埴輪と古墳時代後期の遺構を確認。さらに遺跡が衝突に並がることが予想される。	共同住宅
21	舟子古墳跡 第20次調査	兵庫区舟子坂2丁目 1061番地157、1064番地158	神戸市教育委員会	阿部敏生	25㎡ 25㎡	14.04.08～14.04.12	西石ケ谷3号坑の周囲は確認できず	個人住宅
22	寺谷通跡	西区塩谷町寺谷字城ノ市、中村ノ市、大之堀	神戸市教育委員会	浜谷誠吾	108㎡ 108㎡	14.10.07～14.10.11	開発事業にともなう試掘調査。城ノ市地区では遺構と遺物を確認。	開発監査
23	南谷城跡 第2次調査	西区塩谷町寺谷字下西谷ノ谷	神戸市教育委員会	阿部敏生	75㎡ 75㎡	14.10.03～14.10.11	南谷城跡後方の遺構を確認。	農業関係
24	新方通跡 第44次調査	西区伊丹谷町新方字平坂ほか	神戸市体育協会	山本雅和	780㎡ 2,230㎡	14.04.15～14.10.02	弥生時代初期から室町時代後半の5時期にわたる遺構を確認。弥生後期～古墳前期は遺跡密度高い。	新規(出合新幹線)
25	小山通跡 第6次調査	西区小山3丁目8番1	神戸市教育委員会	浜谷誠吾	194㎡ 191㎡	14.11.20～14.11.29	古墳時代～室町期と中世の遺構を確認。道路の車輪跡に当たると考えられる。	店舗
26	二宮京造跡 第1次調査	中央区二宮町1丁目414	同上	同上	330㎡ 300㎡	15.03.06～15.03.31	弥生時代後期大墓を検出	共同住宅
27	南所古墳跡	北区淡場町寺谷字南所	人手町大学史学講究会 研究会	森下重和 森本千子	500㎡ ㎡	14.07.08～14.09.26	南所3号坑の調査において6世紀前半の灰陶古墳の埴輪式石室を確認。埴輪器・土器器・馬具等の鉄製品・耳環・錢幣・金銀器製品などが出土。	学術調査
28	相生城跡	西区平野町相生	兵庫県教育委員会	渡辺昇 羽野洋一	688㎡ ㎡	14.07.03～14.08.01	小山の南所古墳跡に伴う灰陶・埴・圓筒埴輪等が検出され。弥生時代の方形・円形の窓穴仕掛け各1棟検出された。	道路(国道175号線)バイパス工事
29	神北古墳跡	西区神北町北	兵庫県教育委員会	森内秀雄 石川千子 鈴木千子	4,226㎡ ㎡	14.08.19～15.01.17	4基(うち1基は灰陶のみ)の窓穴とそれに付随する作業場を確認。窓穴1号窓穴以外は1丁前後で窓穴を複数設けている。窓穴の形状は窓穴底面座が丸を冠した形となり、最も大きい窓穴は直径約1.5mである。	道路(国道175号線)バイパス工事

平成14年度 神戸市埋蔵文化財調査位置図
(各遺跡の番号は羽柴道跡と一致)

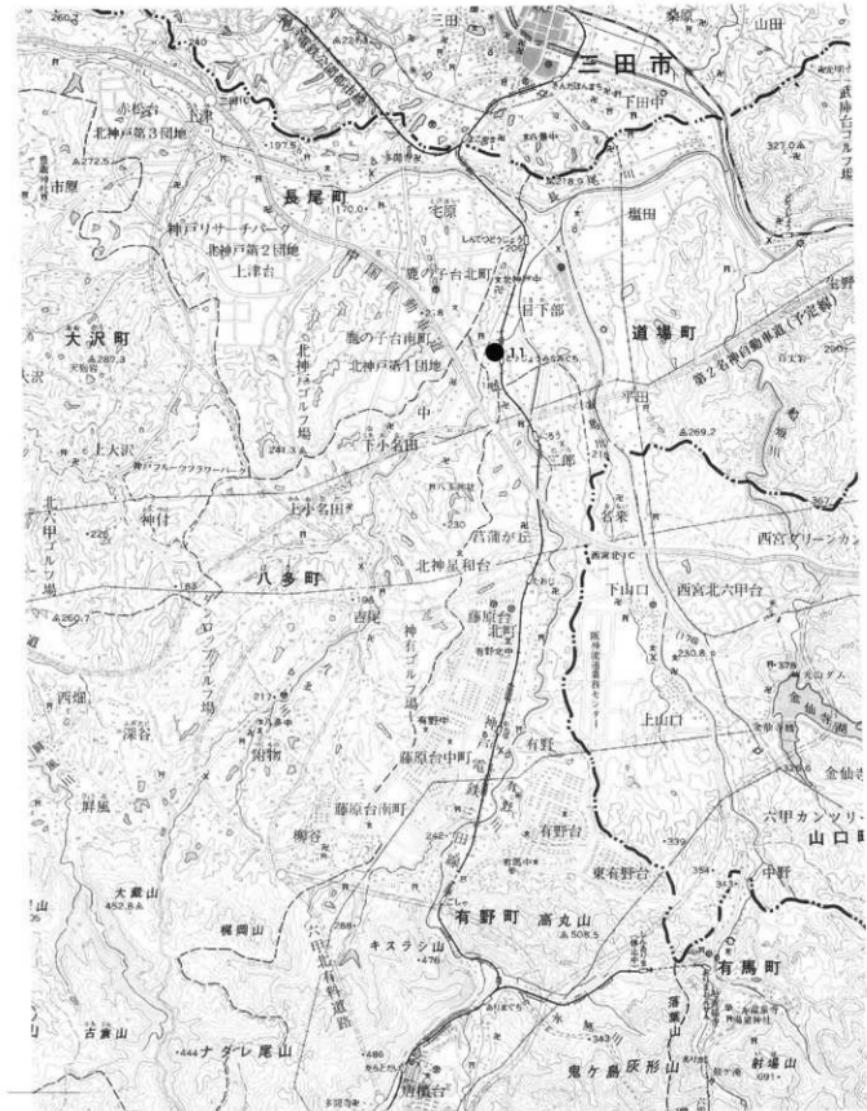




調査地点位置図 1



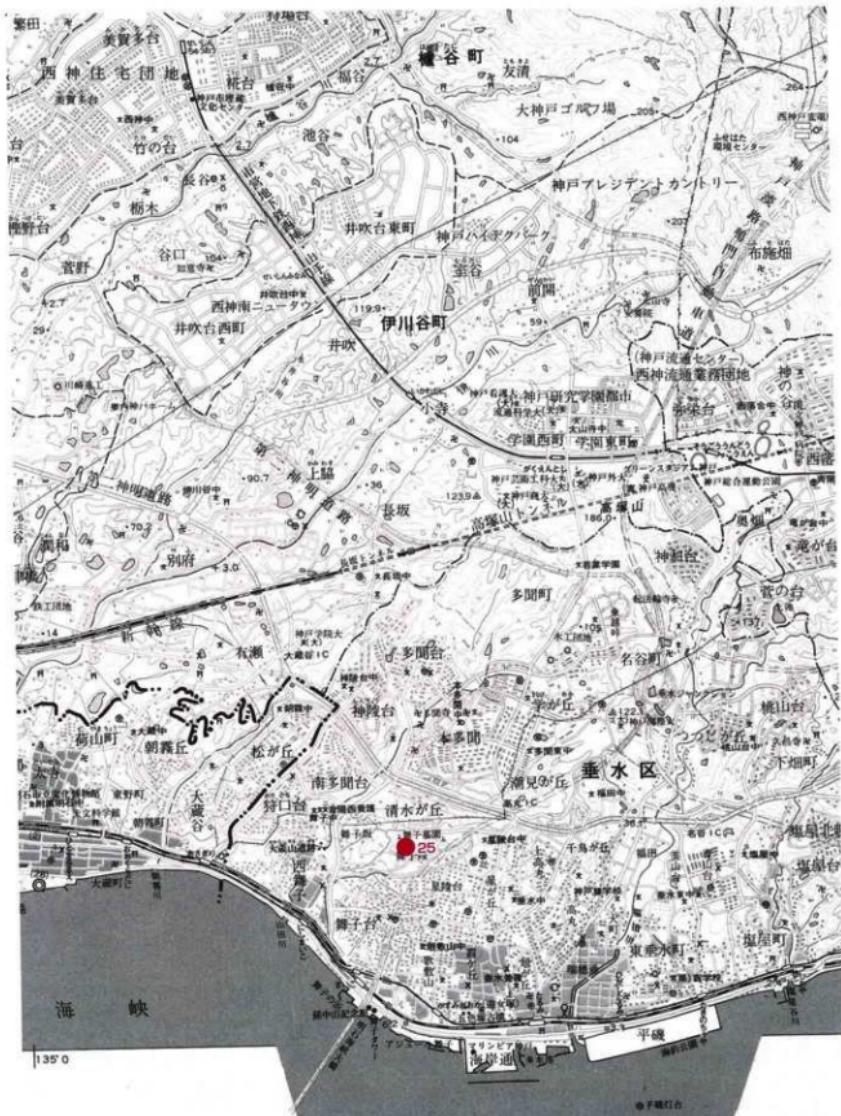
調査地点位置図 2



調査地点位置図 3



調査地点位置図 4



調査地点位置図 5



調査地点位置図 6

II. 平成14年度の復興事業に伴う発掘調査

1. 森南町遺跡 第1次調査

1.はじめに

森南町遺跡は、六甲山南麓の扇状地上に立地する縄文時代晚期から中・近世に及ぶ集落・生産遺跡である。当該地の北に隣接する森北町遺跡は、弥生時代中期から中世の遺構・遺物が大量に検出されているが、その南に近接する当地に関しては遺跡の有無等についての情報は、長く不明のままであった。

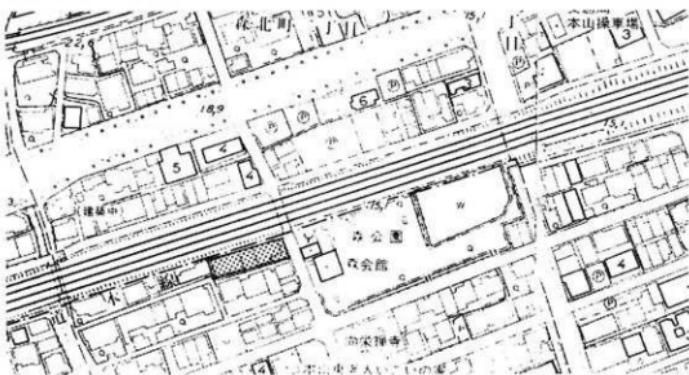


fig.10
調査地位位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は当該地に計画された土地区画整理事業に伴うもので、平成14年7月に試掘調査を実施した結果、弥生時代の遺構・遺物が確認されたため、道路建設によって遺跡に影響が生じる部分について発掘調査を行うことになった。

現代の盛土直下に近・現代の耕土があり、それを除去すると弥生時代から中世の遺構面に達する。遺跡は南に向かって下がる緩傾斜地に立地しているが、当該地は後世の削平によってほぼ平坦地となっており、北辺では現地表下約50cm、南辺では約60cmで遺構面に達

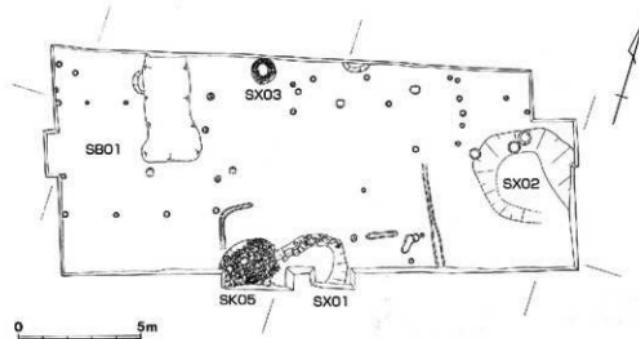


fig.11
第1遺構面平面図

する。遺構面のT、Pは約13.5mである。

今回の調査地からは28ℓコンテナで5箱ほどの縄文時代から江戸時代までの土器類と弥生時代の杭が約300本出土した。遺構面は1面で、弥生時代と中世の遺構を検出している。

縄文時代及び江戸時代に関しては、遺物は出土したが、明確な遺構は検出されなかった。周辺に当該期の遺構が存在するものと考えられる。弥生時代から中世の遺構には掘立柱建物、井戸、柱穴、土坑、溝や杭列などがある。

遺物整理等が未完のため各遺構の時期を確定することはできないが、以下、主な遺構・遺物について略述する。

S D02 調査区中央付近で、L字に交差した状況で検出された幅約3mの東西および南北方向の溝である。

南北方向の溝は北端で幅を拡げ約6mを測る。北端での深さは5cm、南端は後述のSK05で切られているがその付近で深さ約0.4mを測る。

東西方向の溝は東端での深さ0.3m、西端での深さ約0.4mで西に向かって緩やかに下る。東西方向と南北方向の2本の溝が交差する地点で、東西方向の杭列が2条検出された。北側の杭列は東西の長さ約5m、南北の最大幅0.7m、これより約1m離れた南側の杭列は東西の長さ約2m、最大幅0.3mである。北及び東側からの水流の方向を調節する堰の機能を有するものと考えられる。

また、南側杭列の西側から長さ1.6m、幅0.3m、厚さ約2cmの長方形の板材が検出された。板材は溝底面からは約15cm浮いた状態にあり杭列との関連性は考えがたいが、より検討を加えて結論付けたい。

杭には直径10cm程度の、表皮がついたままの材を加工したものや、直径約20cmの木材を蜜柑剤りにしたもの、板状のものなどが見られる。溝底より上の残存状態は良好ではなく、残りのよいものでも長さ約20~30cm程度である。杭の全長は様々であるが最大で約50cmを測る。杭の先端の加工面は滑らかで、金属の刃で削ったものと推定される。

溝埋土からはごく少量の縄文時代晩期の土器片と共に、弥生時代中期の土器片、サヌカイト刃器などが出土している。

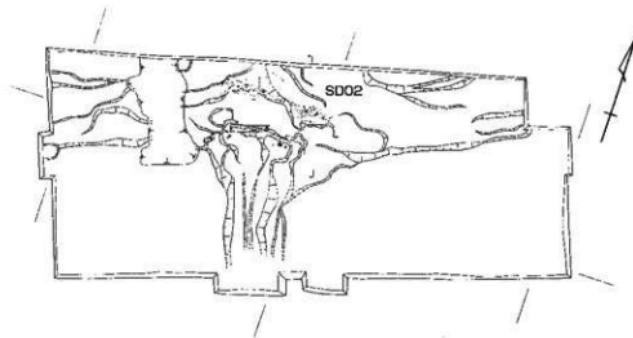


fig.12

第2遺構面平面図

0 5m

弥生土器は小片が多く、かつ少量で時期を明確にできないものもあるが、大半は中期中葉を中心とする時期と思われる。ただし、これが溝の構築時期を示すものかは断定できない。来年度以降の調査の結果と、整理作業の終了を待って正確な時期を決めたい。

S B01 南北3間(4.7m)、東西3間(6.1m)の掘立柱建物で、主軸はN20°Wである。Pit 1・2から土師器小皿の細片が出土した。時期は今確定できないが中世のものである。

S X01 東西3.5m、南北1.9m以上、深さ約0.4mの不整長方形の土坑で、北・西側に石組みを伴う。西側の土坑(S K05)が埋没した後で構築されている。水溜用のものと考えられるが性格は明確ではない。埋土からは土師質羽釜片、土壁片、花崗岩製石臼片などが出土し、西側石組みを除去中に備前すり鉢片などを検出した。15世紀後半の造構と思われる。



fig.13
S D02 桁列・板材



fig.14
第2造構面全景

S K05 東西2.5m、南北1.9m以上の凹形土坑で、前述のS X01に東端を切られている。土坑内には多量の人頭大から拳大の石が投棄されていた。多量の石に混じって少量の土師器小皿・土師器鍋・瓦質羽釜や陶器の小片が出土した。

S X02 東西4.0m以上、南北3.9m、深さ約0.3mの不整規円形の土坑である。土坑内には人頭大から拳大の石が投棄されていた。埋土から土師器小皿片、中国製青磁碗片のほか、中央部の底面で十壁片と共に土師器鍋が1個体分出土した。15世紀後半から16世紀と考えられる。北辺に3基の円形土坑が検出され(S K05~07)、内1基(S K06)には桶の一部が残存していた。他の2基の土坑についてもその規模から考えて、内部には桶が設置されていたものと推定される。桶設置遺構の時期については、出土遺物が少量のため確定しがたい。近世に下る可能性がある。

S X03 直径約0.6m、深さ0.6mの石組井戸である。石組みは4段目まで残存しており、井戸掘形の底面には直径約30cmで深さ約10cmの水溜が設けられている。埋土から少量の土師器・青磁片が検出された。

このほかの遺物としては弥生時代後期の上器片、鎌倉時代の土師器・瓦器類、江戸時代の陶磁器・土師器や土製品などが検出されている。

3.まとめ 当該地は今まで遺跡の存在が知られていなかった地区で、今回の調査で遺跡の存在とその内容の一端が明らかになった意義は大きいと考えられる。

特に弥生時代と考えられる溝(水路)は、水田に伴う導水施設と見られ、周辺に当時の水田遺構が広がっている可能性が極めて高いものと考えられる。また水田を営んだ人々の集落も近接した場所で検出されるものと考えられよう。

また今回の調査では検出されなかった縄文時代晩期・鎌倉時代および江戸時代の遺構も、周辺に存するることは十分に推定される。

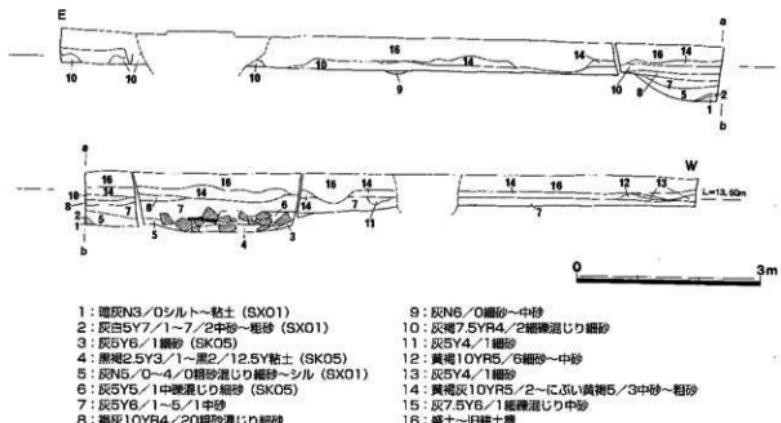


fig.15 調査区南壁断面図

2. 出口遺跡 第6次調査

1. はじめに

出口遺跡は、六甲山南麓の扇状地上に立地する弥生時代から中世に及ぶ集落遺跡である。当該地の南に隣接する出口遺跡第1次調査地点では、平安時代後期の建物や自然流路が検出され、縄釉陶器、灰釉陶器、中国製白磁碗・皿、青白磁合子や「蘇民将来…」の墨書き木簡、石硯、下駄などが出土している。またこれに隣接する第5次調査では平安時代の建物や古墳時代の自然流路などが検出され、古墳時代では韓式土器、鉄製鋤先、滑石製玉類や銅鏡片などが出土した。

さらに今回の調査地点の西側に南北に通る都計道路中野線立体改良に伴う発掘調査（出口遺跡第2次）でも、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が出土している。

遺物の中には、平安時代の石製巡方の破片（ $2.1\text{cm} \times 2.2\text{cm}$ ）があり黒色の石材からみて下級官人のものと考えられる。周辺で確認されている同期の建物址やその他の遺物と共にこの地域の歴史を考える上で重要な資料である。

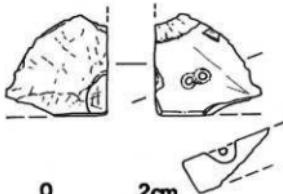


fig.16 第2次調査地出土 巡方

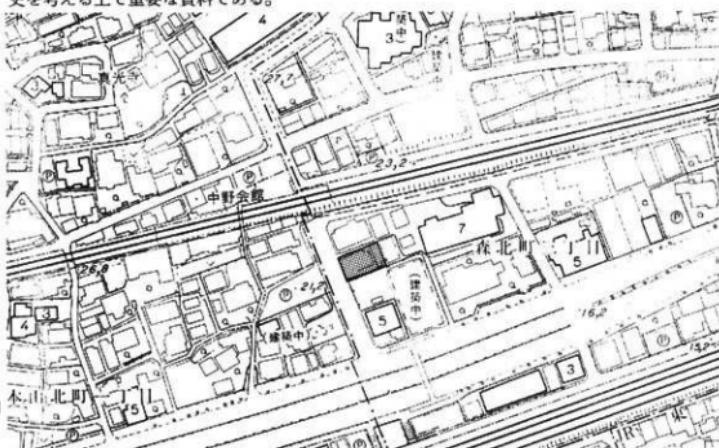


fig.17
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は当該地に計画された共同住宅建設に伴うものである。

基本層序

現代の盛土直下に中・近世の耕土がありそれを除去すると古墳時代から中世の遺構面に達する。当該地はもと北から南に緩やかに下がる傾斜地で、中・近世に棚田が造成されたため北半は平坦面を残すが南半は段状となっていた。このため北辺部での遺構面は現表土下約50cmで達するが、南辺部では約1mの盛土があった。

今回の調査地からは28ℓコンテナで10箱ほどの縄文時代から江戸時代までの遺物が出土

したが、検出できた遺構面は1面であった。遺構には掘立柱建物、柱穴、土坑、溝や木棺墓などがある。以下、主な遺構・遺物について略述する。

- S B01 南北2間(4.5m)以上、東西2間(5.3m)の掘立柱建物で、主軸はN11°Wである。
Pit50からTK47型式前後の須恵器壺蓋の細片が出土した。他の柱穴からも極少量の須恵器・土師器の小片が検出されたが、いずれも時期を決定し難い。

今回の調査では約70基のピットが検出されその中には11世紀から16世紀代の遺物が出土したものがある。これらとS B01の柱穴を比べるとその規模に明らかな差が認められる。また奈良時代以降に一般的な方形の柱掘方とも異なるので、S B01の時期はTK47が示す



fig.18
調査区西半部全景

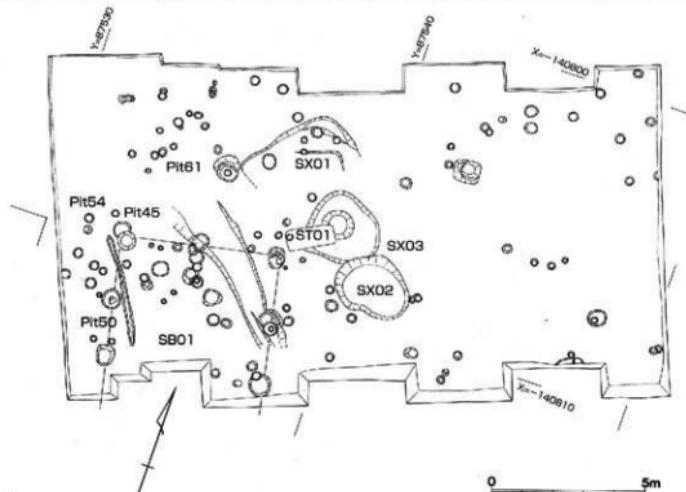


fig.19
調査区平面図

6世紀初め以降で7世紀頃までと考えられよう。

- S X01** 東西3.5m、南北2m以上、深さ約15cmの長方形の土坑である。小型竪穴住居の一部とも考えられたが、柱穴が明確でない事や、南北の幅が狭いこと、また南半部が擾乱で不明確な点を残すことから性格不明の土坑とした。
- 弥生時代後期から7世紀代の遺物が埋土から出土した。
- S X02** 東西2.5m、南北2.1m、深さ北側で約20cmの円形土坑である。後述するS X03を切って作られている。埋土から土師器・須恵器の小片が出土したが時期を決定できる資料に乏しい。
- S X03** 東西2.5m、南北2.4m、北側での深さ約10cmの円形土坑の底部中央に直径約1m、深さ約30cmの円形土坑を掘り込むものである。土坑底部には湧水がみられ井戸なしし水溜とも考えられる。埋土上層に遺物の大半が包含されていた。S X01と同じく弥生時代から飛鳥時代までのものである。なお遺構検出時に直径6mm、厚さ4mmのガラス小玉が1点出土したが、遺構との関係は明らかではない。
- S T01** S X03の埋没後にその埋土上層を切って構築された鎌倉時代の木棺墓である。東西1.5m、南北0.7m、深さ約15cm墓壙が確認された。木棺の痕跡は土層観察でも確認されなかつたが、鉄釘の出土位置から見て墓壙とはほぼ同じ大きさであったものと考えられる。
- 棺内北西部で棺底から若干浮いた状態で中国製青磁碗2、土師器小皿3と全長28.6cm、刃長20.3cm、刃幅2.5cmの鉄刀1が、また中央部から東にかけて土師器小皿3が棺底から約10cm浮いた状態で検出された。前者のうち青磁碗・土師器小皿は棺内での葬送儀礼に使用されたもの、鉄刀は副葬品、後者の土師器小皿3枚は棺蓋上または棺壙設後に行われた儀礼に係るものと考えられる。
- S T01の時期は中国製龍泉窯系青磁碗および土師器小皿からみて13世紀代と思われる。

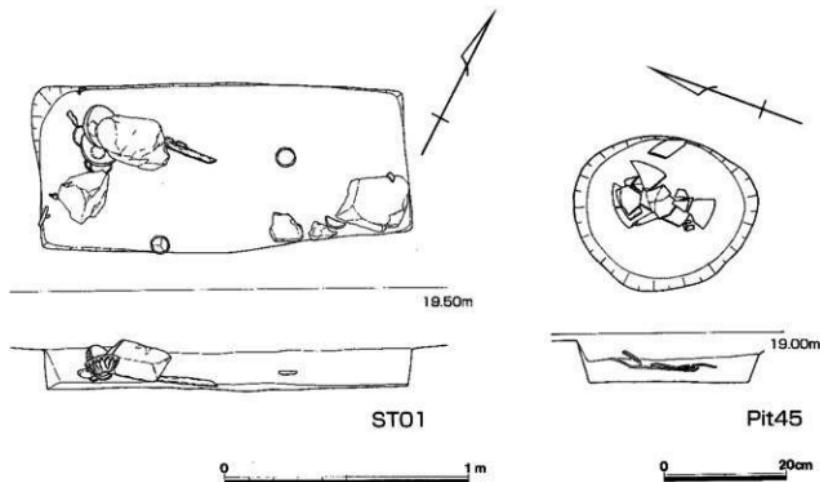


fig.20 ST01・Pit45平面図・断面図



fig.21 S T01

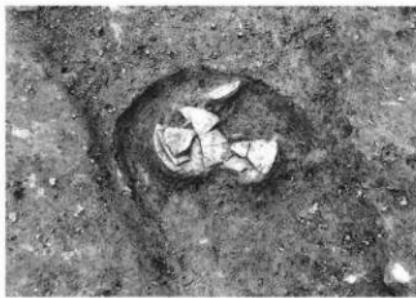


fig.22 P i t 45

鉄刀（腰刀）の大きさも13世紀～14世紀に多いもので、青磁碗・土師器小皿の年代観と抵触しない。

P i t 45 直径約30cm、深さ約7cmのピット内に2枚の土師器小皿が口を合わせた状態で埋め置かれていた。胞衣皿または地鎮等の儀礼に伴う遺構と考えられる。

土師器小皿の型式から15世紀後半から16世紀初めのものと考えられる。

この他の遺物としては縄文時代後期以降の深鉢細片、サヌカイト製石匙・石錐、東播系須恵器捏鉢・椀、備前すり鉢、中国製青磁・白磁、伊万里碗や泥面子などが出土している。

3.まとめ

今回の調査地は、後世の耕作地造成によって南半が削平を蒙っていたのにも関わらず6世紀から16世紀までのピット、土坑、溝、木棺墓などの遺構・遺物がほぼ全面にわたって検出された。中でも13世紀前後と考えられる木棺墓から中国製青磁碗2、土師器小皿6と鉄刀（腰刀）1が出土し、当時の葬送儀礼を解明する上で重要な資料を得ることができた。

また今回の調査地では明確ではなかったが、周辺の調査区で明らかとなっている平安時代の遺構・遺物（特に石帶など）なども視野に入れれば、出口遺跡の歴史的位置も明らかになるものと考えられる。

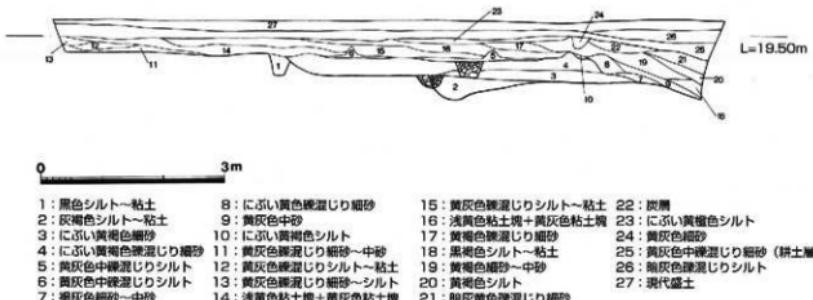
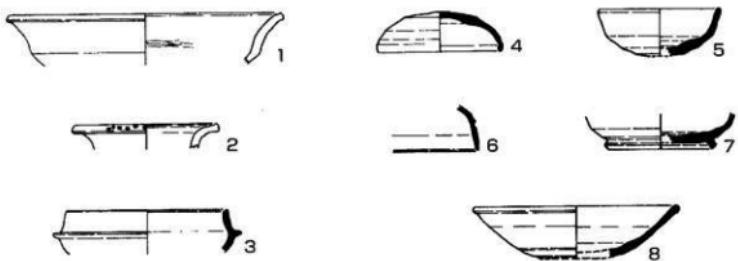
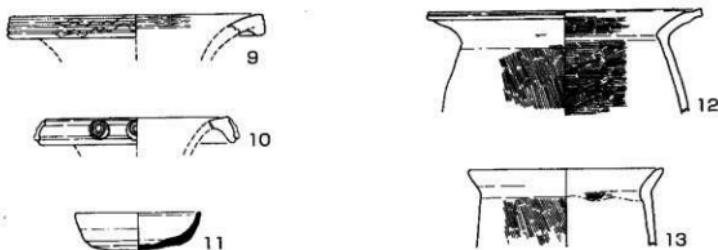


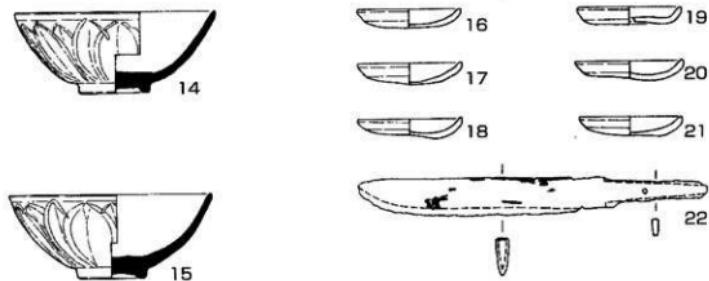
fig.23 調査地東壁断面図



SX01



SX03



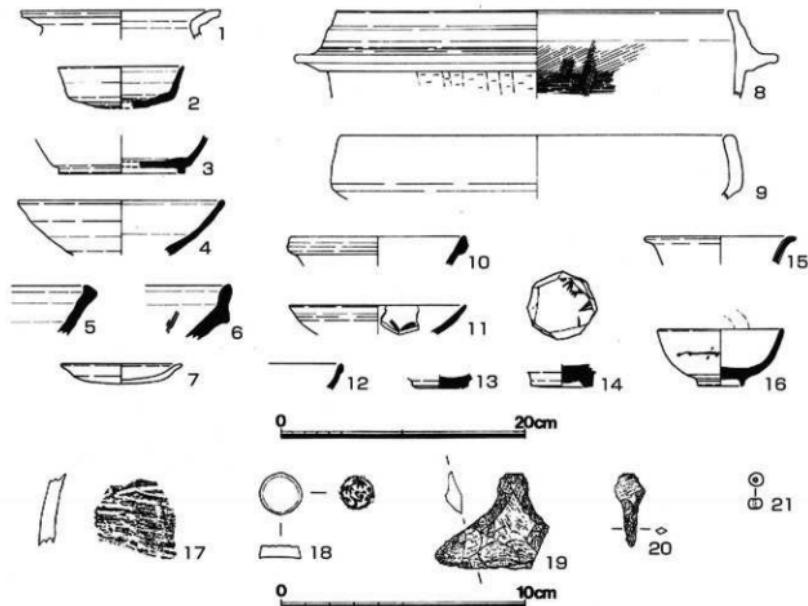
ST01



Pit45

0 20cm

fig.24 出土遺物実測図 (1) 1・2:土師器、3・8:須恵器、9・10:弥生土器 11:須恵器、12・13:土師器、14・15:青磁器、16・21:土師器小皿、22:铁刀(腰刀)、22・24:土師器小皿



1:弓生土器 2~5:須恵器 6:備前スリ鉢 7:土師器小皿 8.9:土師器 10~14:白磁
15:青磁 16:伊万里窯 17:楊文深鉢片 18:泥面子 19:サンカイト製石匙

fig.25 出土遺物実測図(2) 20:Pit61 20:Pit54 その他は包含層などから出土



fig.26
S T01出土遺物

3. 岡本梅林古墳 第1次調査

1. はじめに

調査地は、六甲山南麓の標高50~55mを測る斜面地に位置し、芦屋市域から灘区一帯にかけて、古墳群の存在が確認されている地域に当たる。当地は岡本梅林古墳群の範囲に指定されているが、早くから宅地開発が進行したため、当古墳群の実態は不明であった。

試掘調査の結果、工事予定範囲のうち、文化財の存在が確認された部分について調査を実施した。

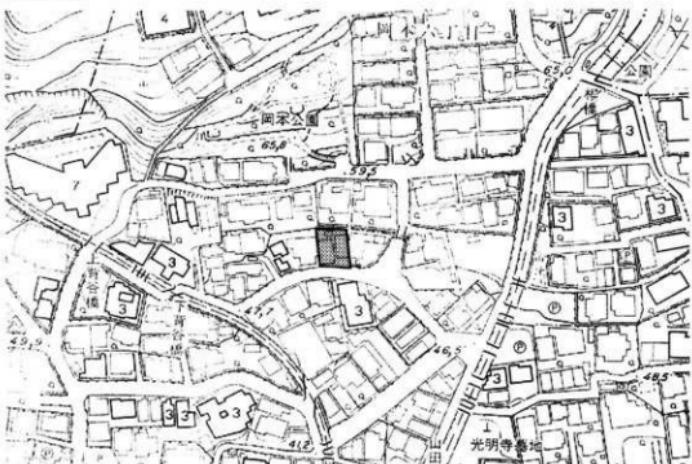


fig.27
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

表土直下において横穴式石室を埋葬施設とする古墳が1基を検出した。

第1号構面

宅地造成時に大きく影響を受けており、墳丘はほとんど残存しておらず、墳形や規模は不明である。

1号墳

石室 両側壁の一部が確認された。奥壁は残存しないが、奥壁基底石の掘形が検出されたため、今回検出されたのは玄室部分であると考えられる。袖や羨道部の有無は不明である。

石材は花崗岩の自然石を使用しており、人為的な面調整は明瞭ではないが、平坦面を玄室側と上面に配置している。持ち送りは、基底石から意識されており、残存する3石までほぼ同一の角度で立ちあがっている。基底石の設置は、上面を水平に設置することを意識しており、掘形の肩部に小難を差し込んで調整している。左側壁は、3石の基底石と抜き取り痕が1箇所検出され、最大3段の石積みが確認された。右側壁は、4石の基底石と抜き取り痕が1箇所検出され、最大2段の石積みが確認された。他にも奥壁側の擁壁工事時に影響を受け、原位置を保っていない石材が2石確認された。

遺物

玄室内より7世紀初頭の土器類、鉄釘、人骨が出土した。

須恵器

杯蓋5点、杯身2点、高杯1点が出土した。いずれも完形である。

土師器

高台付の碗1点が、伏せられた状態で検出された。

- 鉄釘** 3点出土した。原位置を保っておらず、木棺に伴う遺物とは確定できない。
- 人骨** 長骨や腰骨の一部と考えられる人骨片が散乱した状態で出土した。いずれも小片である。
- 石列** 1号墳の南西側に近接して、4石の石列が検出された。西側に面を揃えて設置されており、1号墳の石室に付属するとは考えられず、別の古墳の石室の一部か外部施設である可能性が考えられる。
- 第2造構面** 石室の整地層の下方から、弥生時代後期の竪穴住居が1棟検出された。
- 竪穴住居** 東側の約4分の1を除き、後世の搅乱の影響を強く受けているが、直径約8mの円形の竪穴住居が検出された。北東側の地山を円形に掘削し、平坦面を作り出している。周壁溝が2重に巡ることから、拡張された可能性がある。
- 中央土坑** 床面の中央には、長径190cm、短径150cm、深さ70cmを測る土坑が検出された。炭層が堆積するが、被熱した痕跡認められない。
- 方形土坑** 中央土坑の北側に接して、幅100cm、長さ270cm以上、深さ20cmの方形の土坑が検出された。弥生土器と炭が少量出土した。
- 柱穴・ピット** 床面より、柱穴やピットが40基弱検出されたが、遺構の密度が高く、主柱穴の特定が難しい。



fig.28 石室内遺物出土状況

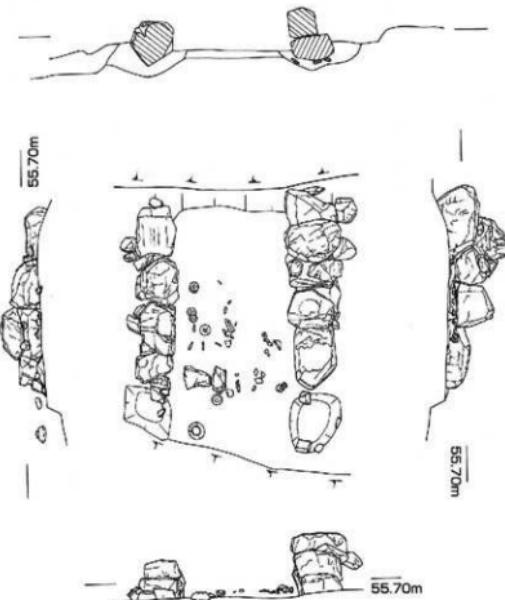


fig.29 石室平面・立面・断面図

3.まとめ

当古墳群の資料は、これまで東京国立博物館に所蔵されている遺物が知られていたが、今回の調査で終末期古墳の存在が明らかになった。住宅地としての開発が早い地域であったため、調査された古墳の絶対量が少なく、当時期の様相は不明な点が多い。六甲山南麓において当時期の古墳は、郡家遺跡で2基確認されているに過ぎない。しかし、終末期の小規模な古墳は群集する傾向があるため、当調査地付近一帯に古墳が存在する可能性が高いといえる。

六甲山南麓において、平野部以外に立地する弥生時代後期の集落は少ない。今回、竪穴住居が検出されたことで、丘陵部における集落立地を考える上での資料となる。



fig.30
第2造構面全景

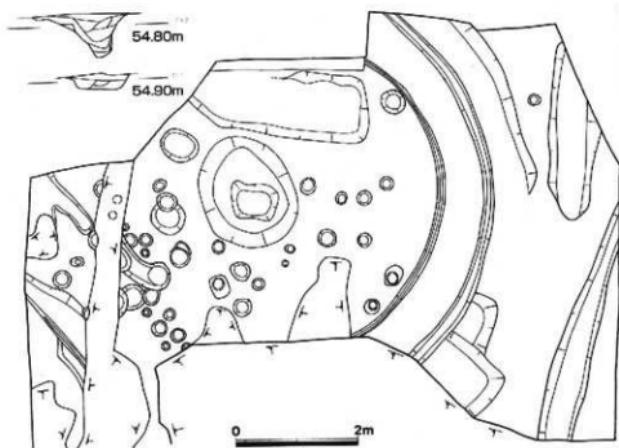
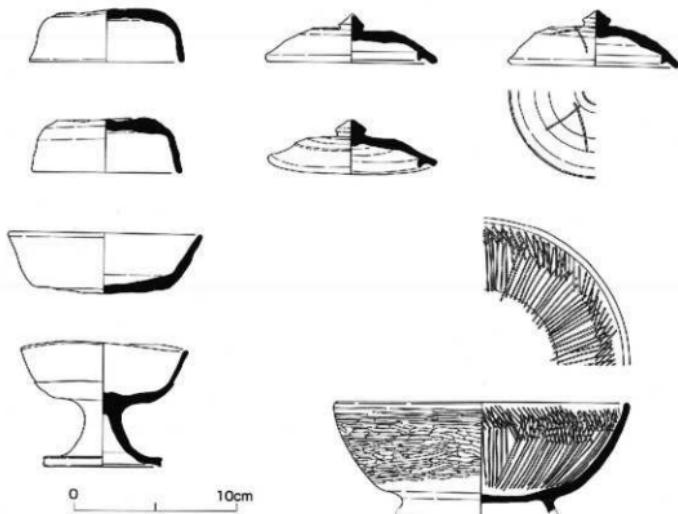


fig.31
第2造構面平面図



4. 郡家遺跡 第71次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、住吉川、芦屋川、天神川等に形成された扇状地に存在している。弥生後期から中世までいたる複合遺跡である。今回調査の実施された城の前地区でも多くの調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代後期の集落が存在することも確認されている。



fig.34
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

基本層序

基本層序は、盛土、耕土、淡茶灰褐色砂質土、灰褐色砂質土、黄褐色シルト混じり砂質土、淡黒褐色砂質土（弥生後期～古墳時代後期遺物包含層）、暗褐色砂質土（弥生の遺物を含む 上面が遺構面）、淡黄灰褐色砂質土（無遺物 上面が遺構面か）、となる。

遺構面から、古墳時代前期の堅穴住居が建て替えて2棟確認されている。

工事の影響深度までの調査であるため、遺構面より下層の暗褐色砂質土にも弥生時代の遺物を含んでいたが、調査せずに保存している。下層の淡黄灰褐色砂質土の上面で遺構面となる可能性も存在する。

S B01

南北約6.2m、東西約2.7m以上、深さ約50cmを測る、方形の堅穴住居址である。下層の出土遺物から、古墳時代前期の住居址と考えられる。北東コーナー付近に周壁溝を確認している。また南側壁面付近で、不整円形の土坑を確認している。土坑の幅は東西約70cm以上、南北約85cm、深さ約17cmを測る。

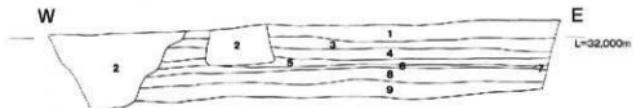


fig.35
調査区断面図

- | | | |
|-------------|-----------------|--------------|
| 1. 盛土 | 5. 灰褐色砂質土 | 9. 黄褐色砂質土 |
| 2. 耕土 | 6. 青褐色シルト混じり砂質土 | 10. 淡黄灰褐色砂質土 |
| 3. 耕土 | 7. 淡黒褐色砂質土 | |
| 4. 淡茶灰褐色砂質土 | 8. 淡紫褐色砂質土 | |

S B02 S B01に削平される。S B01の北側で、北側壁面から北東コーナー部分までがわずかに検出された。方形の堅穴住居と考えられる。東西約3.0m以上、南北約0.7m以上、深さ約17cmを測る。壁面の周囲に周壁溝がめぐっている。遺物は細片ばかりであり、細かな時期は不明である。時期は古墳時代前期である。

3. まとめ

これまでの城の前地区的調査では、弥生時代後期～古墳時代後期の堅穴住居址、溝、旧河道等が確認されている。今回の調査でも、古墳時代後期の遺物が多量に出土した他、古墳時代前期の堅穴住居が2棟（建て替えによる）確認されており、これまでの調査結果の範疇に納まる。今回の調査地の周囲に弥生後期～古墳時代後期の集落が存在することは、現在までの調査結果から明らかである。

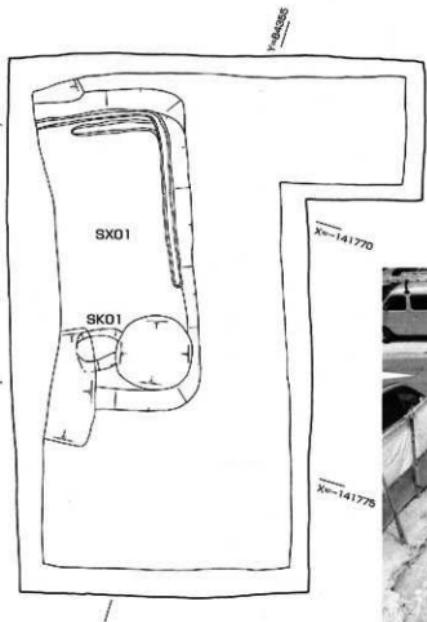


fig.36 調査区平面図



fig.37 調査区全景

5. 西求女塚古墳 第13次調査

1. はじめに

西求女塚古墳は、古墳時代前期に造られた全長約100mの前方後方墳である。東灘区御影塚町に所在する処女塚古墳と、東灘区住吉宮町に所在する東求女塚古墳と共に、古くは奈良時代の『万葉集』に歌われ、古くから多くの人々に知られてきた。

昭和61年に初めて公園内の発掘調査が実施され、その後古墳周辺部を含めて合計12回の調査を実施した。これまでの調査で中国製の青銅鏡をはじめとする副葬品、古墳の表面を覆っていた葺石列が確認されている。

また、主体部や墳丘の各所で慶長伏見大地震（1596年）の影響と考えられる地滑りなどの痕跡も確認されている。

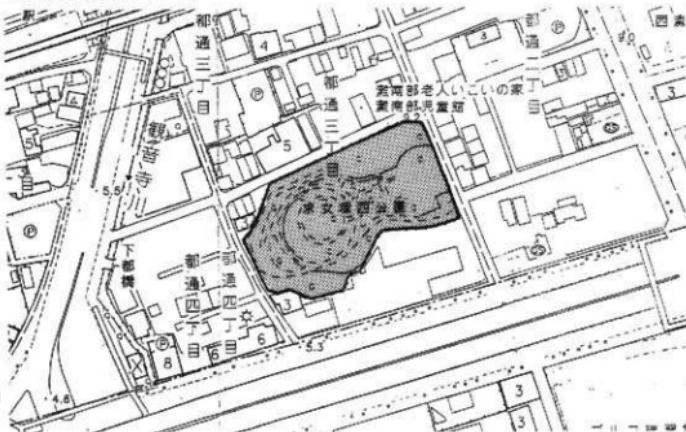


fig.38
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、西求女塚古墳の規模を確定するため、古墳の裾部および葺石列を確認する目的で実施したものである。

XIII区

後方部北東コーナー部からやや東に離れた調査区で、現況の石垣の破壊を避けるため、1辺2m前後のグリッド状の調査区を2ヶ所設定した。調査面積の狭小さからあまり明確な遺構は確認されなかったが、調査区土層断面で落ち込むような堆積が確認され、周溝のような施設である可能性も考えられる。

また、埋土から、二重口縁壺の体部と考えられる土器片が出土した。

XIV区

後方部北東部付近にあたる部分で、今回の調査で最も広い調査区である。検出された遺構は、北側くびれ部から後方部東面・北東コーナー・北面の一部におよぶ古墳裾部および、それに付随する葺石列である。

墳丘

墳丘の土層断面に地割れ・噴砂など数多くの地震痕跡が確認されたことや、転落した葺石の上に中世の耕作土、その上に古墳盛土が堆積していたことなどから、墳丘自体が地震により崩壊し、当時の姿を留めていないものと考えられる。

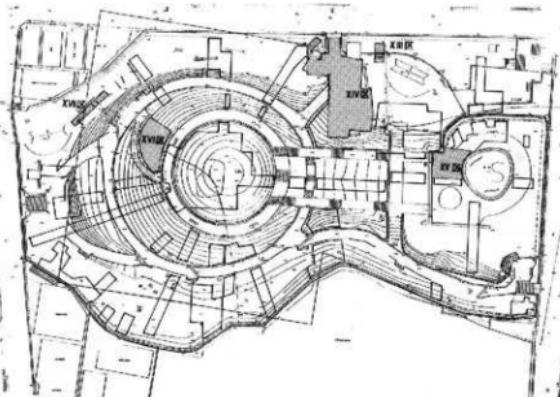


fig.39
調査区配置図

葺石列 北側くびれ部から後方部北面の一部まで葺石列を確認した。後方部北面葺石列は検出長で約9m、後方部東面葺石列は全長約10mを検出した。後方部北面のものは、基底石のみが残存する程度であったが、後方部東面中央付近では遺存状態が比較的良好で、拳大から人頭大の花崗岩を石壇状に積み上げた状況が観察された。おなじく後方部東面中央で、長さ60cm程度の縦長の石を配置するといった特殊な葺石が確認された。その位置から、葺石



fig.40 XIV区石列

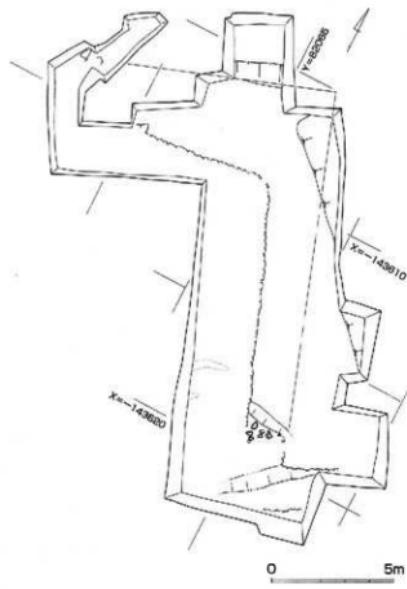


fig.41 XIV区平面図

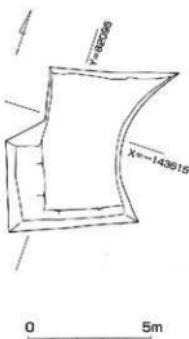


fig.42 XV区平面図



fig.43 XV区全景



fig.44 XVI区地面痕跡

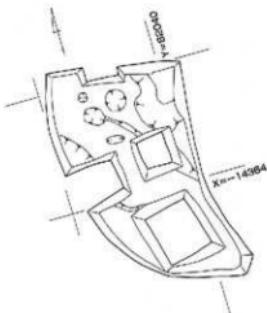


fig.45 XVI区平面図

設置時の目印のような存在であったことが考えられる。一方、後方部北面では、葺石が北側にせり出るように広がっていく状況で検出され、墳丘が地滑りした際に一緒に移動したものと考えられる。

なお、後方部北東コーナー部では、拳大の謙のみが検出され、他の部分で使用されているような大きさの葺石は確認されなかった。周辺で検出した転落した葺石にもそれにあたるものは検出されず、堆積層の乱れもないことから、おそらく築造段階から大きな石を使用せず葺石を葺いたものと考えられる。

実際検出された葺石列は、平成6年度の調査結果から想定されていたものより、後方部東面で西側に約2m、後方部北面でも南側2~3mもずれて検出された。そのため平成6年度第7次調査V区を再掘削し、検討を行なった。その結果、北側くびれ部と後方部東面との間に並行に2mの葺石列のずれを確認した。くびれ部に付帯する張り出しの可能性もあるが、周辺の状況から地震による地滑りによって作り出されたものと考えられる。その傍



fig.46 XIV区 莖石縁部



fig.47 XIV区 土器出土状況

- 証として、①後方部東面とくびれ部を東西方向に合わせれば、ちょうど後方部東面葺石列が一致すること、②前方部北面の葺石列が他の部分の葺石と異なり、いびつな設置されていること、③地震による地滑り面が前方部葺石列の下に及んでいることなどが挙げられる。
- 造出部** 第7次調査の調査結果から想定されていた施設であったが、今回の調査では葺石などの施設および裾部などは確認されなかった。
- 出土遺物** 北側くびれ部テラス付近で山陰系の土器と考えられる土器片が、また、転落した葺石の中から、奈良県桜井茶臼山古墳から出土した二重口縁壺と同型と考えられる土器が出土している。
- XV区** 前方部北西、砂場の西隣に設定した調査区である。第12次調査で検出された葺石列を検出し、断ち割り作業等補足調査を行なった。
- XVI区** 後方部西、平成4・5年度第5次調査I区の西隣に設定した調査区である。調査の結果、慶長伏見大地震時の地滑り面を検出した。
- XVII区** 後方部西、XVI区の西隣に設定した調査区である。調査の結果、後方部の主体部を崩壊させた大地滑りを、また、葺石列は確認されなかったが、後方部西面の填丘裾部を検出した。

3.まとめ

今回の調査で得られた大きな成果は、①後方部が平成6年度第7次調査の成果から想定されていたものよりも1辺が2~3mも小さくなり、後方部の幅が約53m、北側の長さ約50m、南側の長さ約53mのいびつな形をした後方部であると判明したこと、②ほとんどの調査区で慶長伏見大地震の痕跡が確認され、後方部が大規模な崩壊を起こしていると判明したこと、③畿内中央の最古級の古墳から出土したものと同型の土器が出土したこと、西求女塚古墳が最古級の前方後方墳であると一層明確になった。

一方、今後の問題点としては、前方部造出部の有無である。今回の調査では造出部の明確な痕跡は確認されなかったが、地震の影響・後世の削平などで一部消滅してしまった可能性がある。そのため、造出部付近の確認調査を行なう必要性があると考えられる。

今回検出された地震痕跡は、独立行政法人 産業技術総合研究所 寒川 旭氏に鑑定していただいた。

6. 雲井遺跡 第14-1・2次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、雲井通2丁目～琴ノ緒町7丁目までの約23,000m²の範囲に広がる大きな遺跡である。これまでに13次に及ぶ発掘調査が実施され、縄文時代早期、前期、晚期、弥生時代、古墳時代、中世の時期の遺構が確認されている。

fig.48
調査位置図
1:2,500



2. 調査の概要

14次-1区

今回の調査は、公有地の売却に伴う調査で2箇所(14次-1・2区)の調査を実施した。

第1遺構面

第1遺構面は、中世の遺構面で調査地の南半部において土坑4基と溝1条を検出した。

S K101

S K101は、一部調査区の西辺にかかる、直径1.8m、深さ15cmほどのやや楕円形の土坑である。S K102を切って掘り込まれている。

S K103

S K103は、長辺1.8m、短辺1.4m、深さ10cmの土坑である。

S D101

S D101は、幅約30cm、深さ3cmの南北方向にはしる浅い溝である。北端をS K102によって切られている。

第2遺構面

第2遺構面において溝1条と不明遺構6基を検出した。

S D201

S D201は幅約70cm、深さ25cmの溝で調査区のはば中央を横切るように流れる。多量の弥生土器が出土した。土器は出土状況から溝内に一定の間隔で並べられていた可能性が高い。これらの状況から何らかの祭祀に関わる遺構と考えられる。

平成9年に実施された西に隣接する建物の調査において同様の溝が確認されておりこの溝に続くものと考えられる。

第3造構面 第3造構面において不明造構3基と不定形の落ち込み3箇所を検出した。

S X301 S X301は、長径1.0m～50cm、深さ15～20cmの楕円形の造構である。径1.8m、深さ15cmほどの楕円形の土坑である。SK102を切って掘り込まれている。

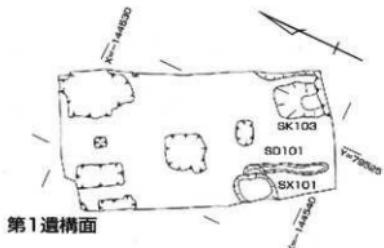
下層 第3造構面以下についてもT.P.12.5mまで調査を行ったが造構面は確認されなかった。

14次-2区

地表下80cmほどの近・現代の表土の下に5～10cmの中世の旧耕土が数層あり中世の造構面である暗灰褐色粘質砂になる。この暗灰褐色粘質砂は層厚10cmほどで弥生時代～古墳時代の遺物を含む。さらに20cmほどの弥生時代中期の包含層である暗褐色粘質砂を経て地表下約1.5mで弥生時代中期の造構面となる明黄色粘質細砂に達する。

第1造構面 第1造構面において掘立柱建物1棟、集石造構、土坑等を検出した。

S B101 S B101は、東西2間×南北2間以上の掘立柱建物である。北東部分を大きな搅乱によって削平されているが、6基の柱穴を検出した。東側に庇等の取り付く可能性がある。柱痕



第1造構面

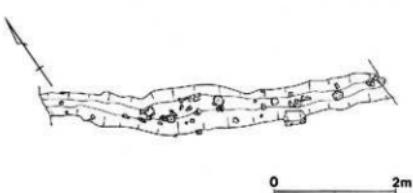


fig.50 S D201平面図



第1造構面



fig.51 第2造構面全景

fig.49 調査区平面図



fig.52
14-2区
第1遺構面全景

からは、11世紀末～12世紀初頭の遺物が出土している。柱痕より直径20cm程度の柱材が使用されていたようで、一部の柱穴には、底に石を据えたものも認められる。

集石遺構 集石遺構は、調査区の南東隅において検出され幅2.5m以上、深さ20cmで南へさらに拡がる。遺構内は多量の拳大の石が詰まっており石の種類は、花崗岩が比較的多い。11世紀末～12世紀初頭の遺物が出土している。

第2遺構面 第2遺構面において竪穴住居1棟とピット若干を検出した。

竪穴住居 直径10m程度の円形の竪穴式住居である。調査区内において南側約3分の2を検出した。残存する深さは10cmほどで、周囲に幅30cm、深さ10cmの周壁溝を廻らす。中央土坑は長径1.5m、短径1.0mの楕円形で壁面は熱を受け赤く焼け締まっている。また深さは50cmほどで底から20cmほどは泥化した炭が堆積している。東西の両端に直径30cm、深さ30cmほどのピットを作った。

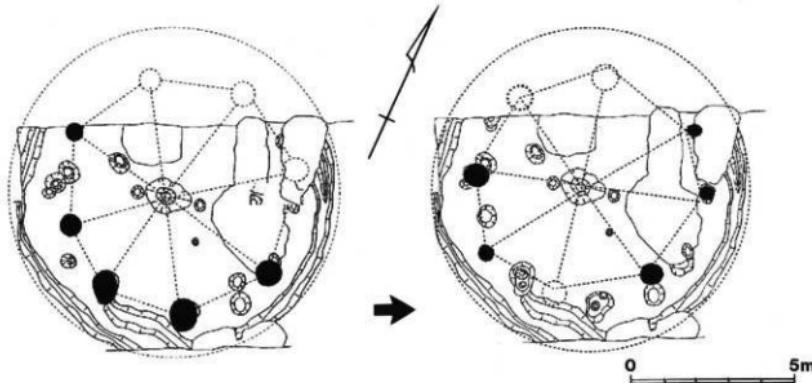


fig.53 竪穴住居・柱復元図



fig.54 積穴住居

柱穴は周壁溝の内側に直径60~70cm、深さ80~100cmの規模で15基が確認された。柱痕跡より柱材は直径20~25cm程度であったと考えられる。柱穴は、切り合いなどから大きく二時期に分けられることから、本来復元規模で8本柱の主柱穴をもつ建物で、途中建替えがなされたようである。

3.まとめ

今回の調査は、雲井遺跡という弥生時代を中心とする広い遺跡のやや離れた2箇所について調査したものである。

調査の成果としては、弥生時代前期の遺構面が確認され集落の範囲を知る手がかりとなった。また溝内に土器を安置したと考えられる祭祀的な遺構、弥生時代中期の大型の竪穴住居など多くの良好な資料をえることができた。

特に14-2区において発見された竪穴式住居については、中央土坑の両端のピットを柱穴とすると時期はやや下るもの、弥生時代前期の「松菊里型住居」の構造をとる可能性がある。近年、明らかにされつつある同タイプの住居の分布・伝播経路などを考え合わせると大変興味深い。

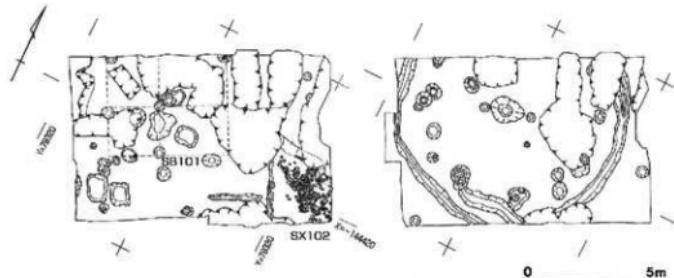


fig.55
調査区平面図

7. 兵庫津遺跡 第29次調査

1. はじめに

今回発掘調査を行った地点は江戸時代の西国街道が兵庫津の町の西に入る地点、柳原惣門が所在した地点にあたる。

柳原惣門について史料でその存在を確認できる最古のものは延宝8年(1680)の『福原警鏡』で、最も新しいものが明治2年(1869)の『兵庫津細見全図』である。設置・撤去についてはともに記録がなく、その時期を記録の上から確認することはできない。しかし、以下のとおり、柳原惣門は都賀堤と一緒にものとして築造され、撤去されたものと考えられる。

池田信輝による天正8年(1580)の兵庫築城に伴い、兵庫津の町の周囲に防御のため都賀堤と呼ばれる堤とその外側に堀が巡らされる。惣門は西国街道が兵庫津の町に入る地点に設置される出入り口であるわけで、その設置時期について都賀堤の築造と同時であると推定してよいだろう。

またその撤去の時期については、前述のとおり明治2年にその存在が確認でき、一方、明治14年(1881)の『兵庫神戸実測図』には東の惣門である湊口惣門は描かれるが柳原惣門は描かれない。この間に撤去されたものと思われる。明治8年(1875)には都賀堤の撤去が行われており、おそらくこの際に柳原惣門も撤去された可能性が高いだろう。



2. 調査の概要

今回の発掘調査は、柳原惣門の再建計画に伴い、従来不明確であったその規模等のデータを取るために実施した。また、江戸時代の絵図に描かれる惣門周辺に存在した枡形・都賀堤・堀などについてもその状況の確認を行った。

この結果、明治時代以降・江戸時代後期の2面について面的な調査を行い、下層の安土桃山時代の面についても一部確認調査を行った。また、土層観察によって下2面の間にもう1面遺構面の存在することが確認できた。

第1遺構面

明治時代以降の遺構面。惣門撤去後の遺構、道路および宅地にかかる遺構などが検出されている。調査地が柳原戎神社の境内になったのは太平洋戦争後の区画整理によってで

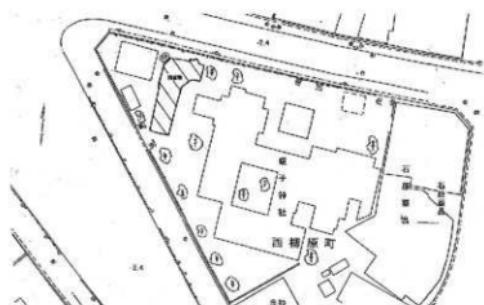


fig.57 調査区配置図



fig.59 SK11

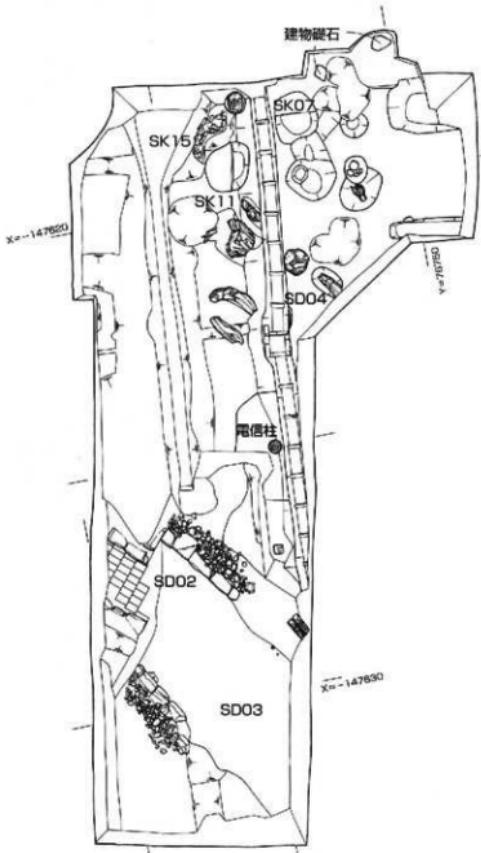


fig.58 第1造構面平面図



fig.60 SK07



fig.61 SK15



fig.62 SD03・05

あり、それまでは江戸時代からの町割りを引き継ぐかたちで土地利用がなされていた。

S D01 南北方向の道路の東側側溝。南の S D02へ排水するものと思われる。底面に煉瓦をならべ道路側の縁石に間知石、対面の縁石に角棒状の石をならべる。間知石の下の根石のなかに打ち割られた道標があった。同じ物の別破片 2 点がこの道路の工事掘削の埋め戻し土からも出土している。

道 路 間知石の西側はアスファルトで覆われている。この舗装面の上層を戦災の焼上層が覆い、旧来の地道が太平洋戦争までに舗装されたことが知られる。

標 柱 打割られて欠損する部分が多いが、「是東尼」・「崎領」と同じ文字が三面（もう一面は文字なし）に刻まれている御影石製の標柱。類例から「從是東尼崎領」と刻まれていたものと推定される。兵庫津が尼崎藩領であったのは天和三年（1617）から明和五年（1769）で、以降は天領となる。したがってこの標柱は遅くとも江戸時代中期まで、おそらくは江戸時代前期に、兵庫津の西の境になる柳原惣門の門前に建てられたものと推測されよう。これらの破片は明治時代以降の遺構・擾乱土から出土しており、天領になって以降も惣門が取り壊される明治時代まで、現地に立っていたか、少なくとも現地にあったことが推測される。

S D04 土管を使用した排水管。S D01の直下に同じ方向で埋め込まれる。煉瓦作りの枠があるが、これは埋め込まれており、S D01の底に敷かれた煉瓦が上を覆っている。S D01と一緒に機能していたものではないようだ。これに切られるかたちで電柱の掘形があることから、この土管の敷設はこの地に電気が通って以降ということになる。



fig.63 第1遺構面全景



fig.64 第2遺構面全景

電信柱 側溝 S D01に隣接してその道路側に電信柱の根元が遺存している。その掘形は S D04よりも古い。

標 石 側溝 S D01と溝 S D02の合流点付近で道路面から数cm頭を出す標石が確認されている。地中部分はコンクリートで巻かれている。天の部分に「8」のようなものと矢印のような「木」のような記号が刻まれている。

S D02 幅約1.1m・深さ約70cmの溝。江戸時代からある都賀堤の外側に掘られた堀を改修したもの。底の一定の範囲に煉瓦・板石が敷かれ、両岸には間知石・煉瓦が積まれる。調査地はこの溝をまたぐ橋が架けられていた部分にある。レンガ敷きの範囲は下層にある S D03の架橋部分の石垣が存在する範囲にはほぼ重なり、この範囲も上に架けられた橋に対応しているものと思われる。また調査範囲では両岸全体に石積みなどがなされているようだが、擾乱が多く確定はできない。護岸の石垣についても西岸南部ではその存在が確認されない部分があり、架橋部分のみ石垣があり、他は素掘りの溝である可能性も考えられる。

レンガの存在から、この堀の造り替えは明治時代に入ってのものであることは確実で、都賀堤の削平に伴って堀についても造り替えの行われた可能性が高い。レンガの上に積まれる大型の割り石石材は下の堀に残されるものと同工で、これを転用したものと考えられる。

この溝の底には10cm～20cmの厚さで粗い砂が堆積し、その中に多量の陶磁器をはじめとし、瓦・土人形・恵比寿面・お稲荷さん・白蛇様・灯明皿・汽車土瓶・おはじき・ビー玉・ラムネピンなどが出土している。汽車土瓶には「ひめぢ」「まねき」という文字が書かれ、姫路駅で売られたものであることがわかる。姫路駅の開業は明治21年(1888)末、駅弁とお茶が販売されるようになるのは翌二十二年からである。その上層は埋め立てられた土となっているが、汽車土瓶の存在からこの溝が埋め立てられたのは少なくともそれ以降であることが確認できる。他の出土品とあわせて考えると明治時代の終わり頃以降であるようだ。



fig.65 出土標柱

踏み石 なお、溝底の大きな板石は転用品で、その上面がかなり摩滅している。その形状から惣門踏み石の転用品である可能性が考えられる。

第2遺構面 江戸時代、幕末あるいは明治初期までの遺構面。明治時代以降の道路工事による搅乱が著しいが、柳原惣門にかかる遺構を確認することができた。惣門・礎石建物・樹木・門前の折形・堀等である。

惣門 惣門については江戸時代・明治時代の絵図・地図があり、これに基づいて調査を行った。その結果、推定された地点において、惣門東側の本柱と控え柱を受ける礎石の抜きあとを確認することができた。西側については庭木・石碑の存在など調査区の制約により確認することができなかった。柳原惣門は高麗門と呼ばれる形であり、この二つの礎石の位置から総門の片側の扉の幅が1.8m=一間であることが確認された。したがって、観音開きの扉二枚で門の間口をおよそ二間と推測することができる。

本柱 SK11 門の棟を支える本柱SK11は直径約90cmのプラン不整円形の土坑で、内部には灰黄色粘土とともに瓦片・五輪塔片・礎などが詰まっていた。黄色粘土は屋根瓦の下に敷く粘土と推定され、おそらく惣門解体時に礎石が抜かれ、その凹みを解体時の廃材等で埋め戻したものと推定される。

控え柱 一方約90cmの隅円方形の土坑。灰黄色粘土とともに瓦片・壁片?・礎などが詰まっている。この時期の門の礎石は方形であるのが通例で、プランが方形を保つこの遺構は、本柱に比べ礎石を上手に抜き取っているといえる。

建物礎石 惣門の内側にこれと方向を一にし、扁平な自然石を使う礎石2つが検出されている。その南側は明治時代にレンガを使った建物が建てられ、遺構面が大きく搅乱を受けているためこの礎石が建物のそれなのか、あるいは別の構造物なのか判断できないが、位置的に見て、番所のような建物の礎石である可能性が考えられる。

枠形 惣門前は両翼を都賀堤に、全面を堀で囲われる枠形と呼ばれる広場になるが、ここには黄色系統の粘土質シルトが敷かれ道路面を整えている。堀の対岸の道路面も同様の上で舗装される。都賀堤については全く確認できなかった。

樹木 枠形の惣門前面に明治時代に伐採されたと推定される数本の樹根が遺存していた。大きめの樹木ではあるが、惣門前に樹木のあることは江戸時代の絵画史料に見られず、惣門周辺の様相を復元するため貴重な資料となった。

堀 SD03 第2遺構面からの深さ約1.4m、幅約3mをはかる溝。両側に石垣の積まれる部分があり、この部分に堀をまたぐ橋が架けられていたものと推測される。ほかの部分は素掘りで、法面を土留める特別な施設は確認できなかったが、法面下端に地面に打ち込まれた木杭数本が遺存していた。

堀内に堆積した土は土壤化の少ない粗い砂が主体で、土壤化したシルトなどは客体的に



0 30cm

fig.66 出土標柱（拓本）

しか存在しない。このことからこの堀の水はよどんだものでなく、流水があったものと推察される。堆積土には多量の陶磁器・瓦などが含まれていた。

第3 遺構面 西トレントを縦断する細く深い搅乱溝で確認された遺構面。第2 遺構面の下約40cm、標高1.8mほどで確認できる。確認された遺構はSK15で、壁面に見える幅約1.2m・深さ70cmの土坑。埋土には径10~20cmの円礫が多く詰められる。遺物の出土がなく、時期の判断ができないが、第4 遺構面が安土桃山時代であることから、この面の遺構が江戸時代のうちに収まるのは確かで、SK15の構造と上層にある惣門の本柱との位置関係からすると、これは一代前の惣門にかかる遺構である可能性が高い。

第4 遺構面 西トレントを縦断する細く深い搅乱溝の底およびSD03の下層、標高約1.0mで確認された遺構面。溝あるいは池などの水に関係する遺構が確認された。埋土からは陶磁器・瓦・牛骨等安土桃山時代の遺物が出土している。この時期は兵庫城築城=都賀堤築堤=柳原惣門建立の時期であり、興味深い。

3.まとめ 既設構造物や樹木があるため、惣門の西側の柱については確認できなかったが、東側の本柱と控え柱の礎石据え跡が確認された。その位置関係から門の規模を推測することができ、惣門復元のための手がかりを得ることができた。また惣門周辺の状況もある程度明らかにすることができた。所期の目的の半ばは達せられたと思う。

さらに、部分的な確認ではあったが、下層に幾枚かの遺構面が存在することを確認できることも大きな成果である。

都賀堤等、今回は確認できなかったものもあるが、周辺の調査が進むことによりそれらについても今後明らかになると思われる。



fig.67 惣門跡

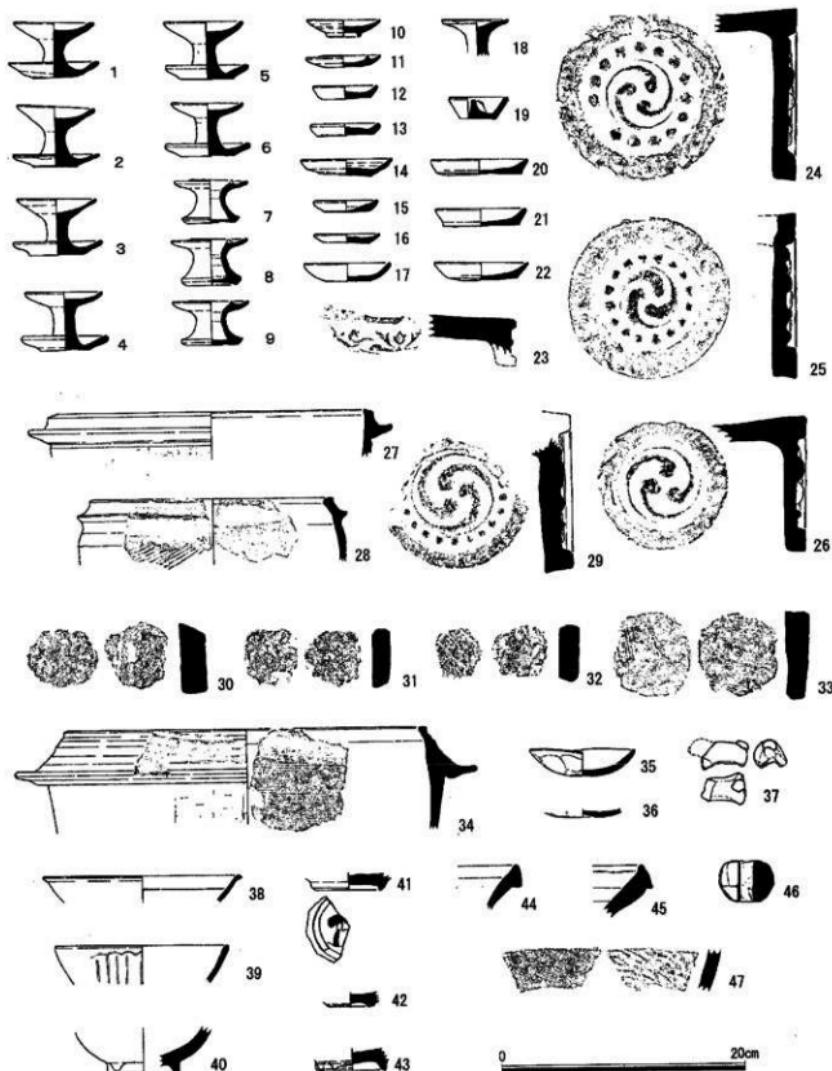


fig.68 出土遺物実測図(1)

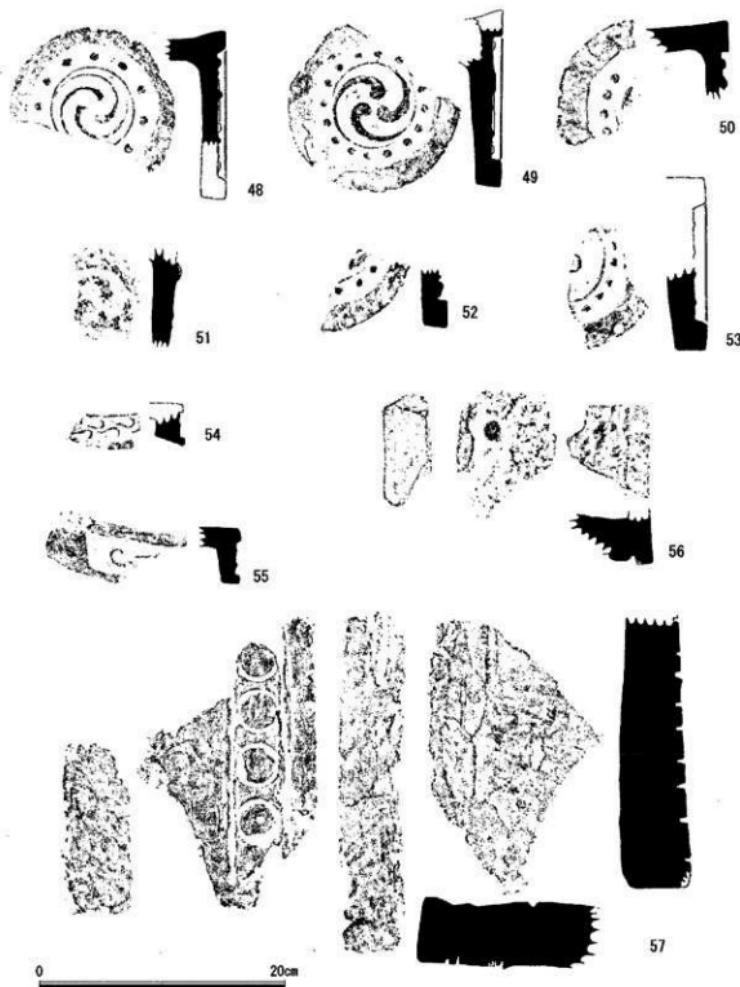


fig.69 出土遺物（2） 1～26：SD01、27：SD02、28・29：擾亂層、30～57：SD05
 1～11・30～32：陶器、12～22・28・34～37・46：土師器、
 23～26・29・48～57：瓦、27：瓦器、33：常滑、38：白磁、
 39～41：青磁、42：唐津、43：志野？、44・47：須恵器、45：備前

fig.69 出土遺物実測図（2）

8. 兵庫津遺跡 第30次調査

1. はじめに

揖津国雄伴郡（八部郡）に所在する大輪田泊＝兵庫津は、奈良時代に主要な港湾、五泊のひとつとしてその名があがり、古くから瀬戸内航路の主要港として栄えた。近年の発掘調査で、古代から近世に至る各時代の遺構・遺物が確認されている。平安時代から鎌倉時代にかけての遺構は確認された数がまだ少ないが、戦国時代から江戸時代にかけての遺跡は質量ともに著しいものがある。近世の兵庫津はたびたびの火災に遭い、その都度、町の復興がなされる。その結果、幾枚もの生活面が確認され、町割り・生活用具などさまざまな要素の具体的な変遷を細かい時代単位で追えるという重要な成果が得られている。

今回発掘調査を行った地点は兵庫津市街が拡張し、本来の兵庫津の町を区画する都賀堤の外側に形成された「出町」である。元禄年間にはすでにこの出町は形成されており、幕末の文久年間にはさらに町並みのひろがっていることを当時の絵図から確認することができる。ちなみに高田屋嘉兵衛の店が今回の調査地の南西、舟入江に面した地点に所在した。



fig.70
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

調査の結果、5面の遺構面を検出し、町屋関連の遺構を確認した。これらのほとんどは罹災しており、それぞれの面で火災層の上面で検出される遺構とこれを除去した段階で検出される遺構の2面があり、実質的には都合10面の遺構面が存在することになる。

なお、後世の攢乱によりほとんど残っていないかったが南区の壁面観察で第1遺構面の上にもう1面の遺構面があることを確認した。また確認のため工事影響範囲以下について一部断ち割りしたところ、両区で第5遺構面の下にさらに1面以上の遺構面のあることを確認している。以下概要について記述する。

第1遺構面

町屋関連の遺構が検出された。北区で溝S D01、S K06・07、胞衣壇SK01～05などを検出した。南区では礎石建物SB01、胞衣壇SK15・22を検出している。

S B01

小型の自然石を礎石として用いる。礎石は7つを確認した。南北の通りは現在の町並み

に合致しているが、東西方向の柱列は一直線上に並ぶものの南北方向の柱列と直角の関係にならない。

S D01 北区の北端で検出された溝。一部に石積みが残る。土壤化がかなり進行している。

S K06・07 S K06・07はS D01埋没後に掘削された土坑。

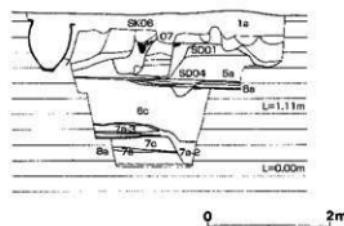
胞衣壺 胞衣壺は7基が出土した。下半を欠いた貧乏徳利を正位に据えるもの1(S K01)、上半を欠いた銷壺を正位にするもの5(S K02~05・15)、土瓶を正位に据えるもの(S K22)がある。SK01~03については、上の遺構面のものである可能性がある。調査時に容器の底を確認できたSK02・03の胞衣壺の底には黒褐色の沈殿物が遺存していた。

第2遺構面 町屋闌廻の遺構が検出された。北区では火災層の上面で上坑SK18~20等が、下面で溝S D02・03、胞衣壺SK08等が検出された。南区では火災層の上面で確認できる溝S D05が、下面で礎石建物SB02、上坑SK17・10等が検出された。火災層からの出土品では北区で出土した棹秤の鉄製錘ならびに南区南西部で集中して出土した泥面子(猪・馬・蛇・桙・エイ・二枚貝)が興味深い。また銅板の切れ端や繩羽口が出土しており、これらはこの住人の生業を探る手がかりになるだろう。

S K08 径50cmほどの土坑に胞衣壺を正位に納める。これは寸詰りの筒型の容器で、あるいは専用の容器かと思われる。

S B02 磚石と思しき自然疊2つが検出されただけであるが、上層のSB01礎石列と重なる位置にあり、これも建物の礎石と推測される。

S D05 SB02の礎石列に平行する断面方形の溝。火災面の上層で検出される。縁石のようなものの抜き跡だろうか。



1a:現表土・盛土・攪乱、2a:表土の土壤化層・火災層がくる(第1遺構面のもう1枚上の遺構面)、2c:淡黄色褐色砂、3a:表土の土壤化層・上面に火災層が薄くくる。第1遺構面、3c:淡黄色褐色砂、4a:表土の土壤化層・上面に火災層が薄くくる。第2遺構面、4c:淡黄色褐色砂、5a:表土の土壤化層・上面に火災層が薄くくる。南区では5a・6a・7a間に何枚かの土壤化面があり、第3遺構面、5a-2:小豆色粘土貼り土間、5c:薄黄色褐色砂、6a:SW03の南にある青灰色の土間・上面に火災層が薄くくる。第4遺構面、6a-2:小豆色粘土貼りの土間、6c:淡黄色褐色砂、7a:表土の土壤化層・上面に焼土層が薄くくる。7a-2:焼土・炭のこりかたまり・整地土?、7a-3:淡褐色シルト質砂・整地土?、第5遺構面、7c:淡黄色砂、8a:灰褐色表土層・非火災面、第6遺構面になると思われる。断ち割りによる確認のみ。

fig.71 調査区断面図

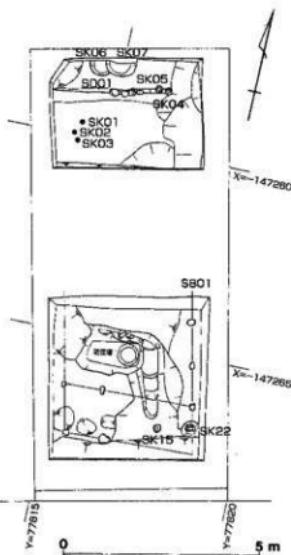


fig.72 第1遺構面平面図

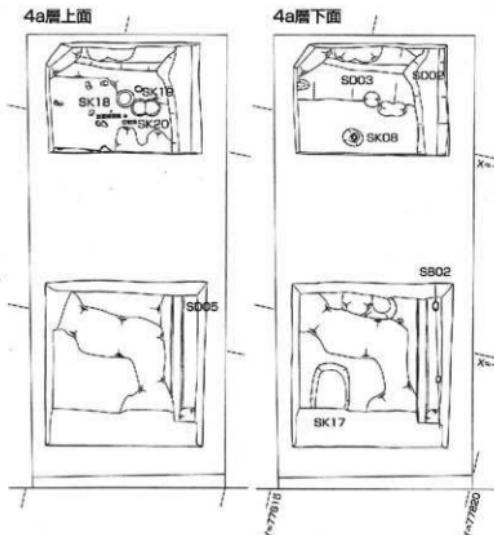


fig.73 第2遺構面平面図



fig.75 SK04・05



fig.76 第1遺構面（北区）

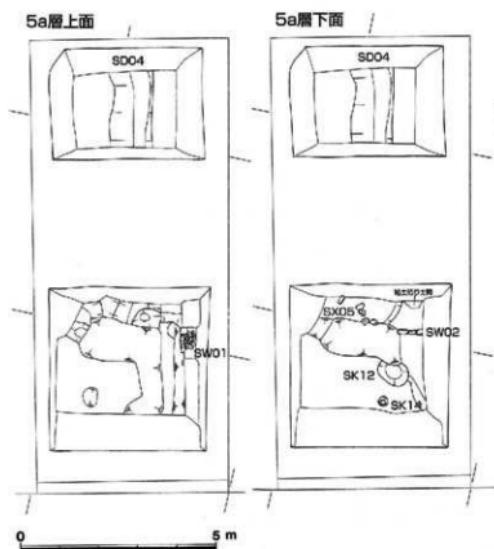


fig.74 第3遺構面平面図



fig.77 第2遺構面（南区）

第3造構面 町屋関連の遺構が検出された。火災層である5a層からは18世紀段階の波佐見焼等が出士している。北区では火災層の上面で溝S D04が、下面で土間が検出された。南区では火災層の上面で石組みS W01が、下面で土坑SK12、胞衣壺SK14、石列SW02、焼土塊SX05などが検出された。

S D04 火災層の上面から掘り込まれる南北方向の幅約1mの深い溝。埋土には陶磁器・錢貨などの遺物が比較的多く含まれていた。この溝よりも東は粘土貼りの土間になっているが西は砂地のままの地面となっている。

SK14 脊部上半に2つ穴を開けた完品の婧壺を正位に据える胞衣壺。

SK12 80cm×60cmのプラン楕円形の土坑、巻貝・二枚貝などの貝殻が多く含まれる。

SW01 上面が火災面にあらわれる石組み。西面する南北方向の石列の東側に裏込め石が詰められる。

SW02 東西方向に並ぶ石列。石列の北側には焼けた粘土・焼土が多く(S X03)、ここが火を扱う空間であったことを確認できる。南調査区の北東隅に小豆色になった粘土貼りの土間面が遺存している。

S X02 SW02の南にある大きな掘り込み。
第4造構面 町屋関連の遺構が検出された。北区は東部を除いて第3造構面と同一レベルになっている。北区で火災面の下面で胞衣壺SK09が、南区で火災面に額を出すかたちで石列SW03が、下面で柱穴多数と石列などが検出されている。

SK09 婧壺を利用した胞衣壺。完品を正位に据える。

SW03 プラン的に上層のSW02同じ位置、東西方向に並ぶ石列。両者の間には間層があり別物であることが明瞭である。SW03もその北側に焼土層(S X05)が堆積し、小豆色の粘土貼りの土間面が一部遺存している。第3造構面と同じ間取り、同じ目的の利用がなされていることを確認できる。SX05からは比較的大きな瓦片も出土している。



fig.78 SK09



fig.79 第4造構面全景

- 柱穴** SW03の北側で数基、南側で多数の柱穴が確認された。
- 第5遺構面** 北区で確認された遺構面の標高が約0.5m、南区は約1.0mとレベルに違いのあることや、北は焼土が多量に堆積するのに南はそれがないなど、状況に違いがあるため両者が同一面であるのか不安が残るが、かといって南区の第5遺構面の下層に火災層は確認されていない。南区では火災層は確認されず、北区の焼土の堆積も他の面と異なっていることからすると、北区で確認された焼土はあるいは火災層ではない可能性もある。
- 北区で火災焼土の整地層およびその下で大きな土坑状の凹みの一部が検出され、南区で柱穴等が検出されている。
- 整地土** 北区では遺構面上に赤く焼けた薄い焼土層が間層をはさんで3面確認できる。この焼土は東側の大きな土坑状の凹みSK21にも厚く堆積している。
- 柱穴** 南区で確認された柱穴は壁面の観察から明らかに第5遺構面のものと確認できるものもあるが、第4遺構面の遺構もあるように思われる。
- 第6遺構面** 下層の状況を確認するために行った断ち割りにより、両区において標高20cm付近にかけての地表土と考えられる土層8a層が確認された。この上に堆積している洪沢砂からは鉄釘等の遺物が出土しており、8a層も遺構面になると考えられる。
- なお、標高約0.0mで湧水することを北区で確認している。
- また、南区の南部では第4遺構面と第5遺構面の間に幾枚かの地表土が確認でき、小規模な造作が複数行われていることも確認できた。

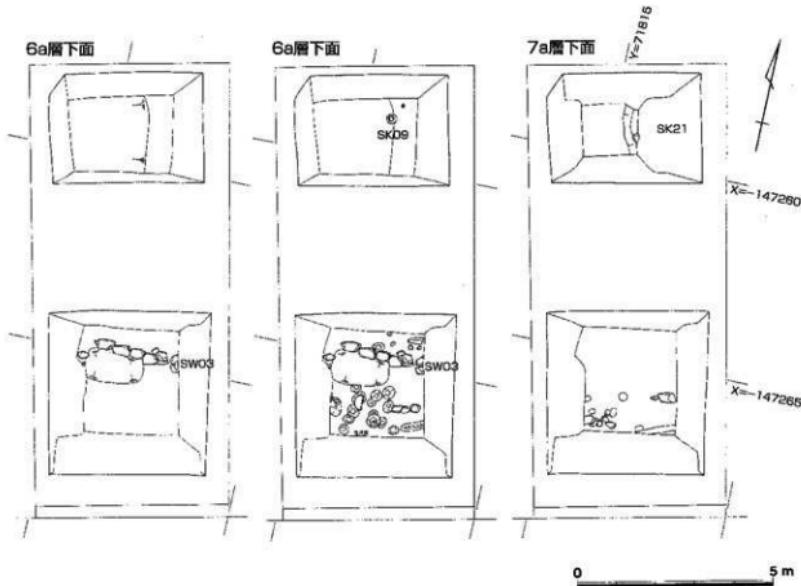


fig.80 第4・5遺構面平面図

3. まとめ

出町地域における初めての発掘調査となる今回の発掘調査で、地下に良好な状態で兵庫津の歴史が埋蔵されていることを確認できたことは大きな成果である。7面の遺構面を確認でき、そのうち5面について発掘調査を行うことができた。

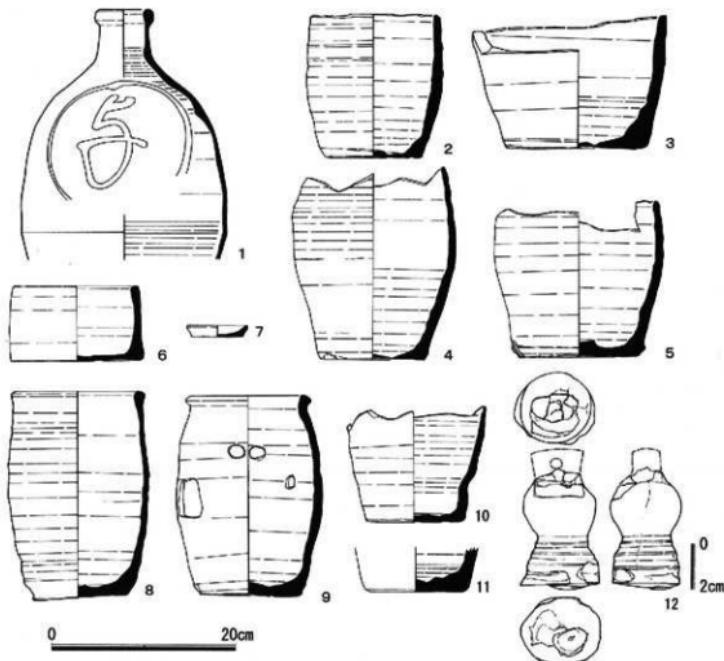
検出された遺構は一軒の町屋、さらにそのごく一部を調査したにすぎないため、家としての全体像はつかめなかったが、礎石や石列など、面を違えても同じ位置で同じ遺構が確認されるものがあり、この町並みおよび、家の間取りが古くからのものを踏襲して受け継がれていることを確認できた。

出土遺物には胞衣壺・泥面子・繩羽口・金属加工片など、人々の生活・生業・当時の風俗などを示す資料があり興味深い。

時期的には第3遺構面で18世紀頃の磁器が出土しており、他の面もすべて江戸時代に収まると思われるが、出土遺物の整理がすんでいない現状では各面の細かな時期比定はできていない。これについては整理後あらためて検討したい。



fig.81 調査地周辺



1:SK01, 2:SK02, 3:SK03, 4:SK04, 5:SK05, 6:SK08, 7:SK05, 8:SK09, 9:SK15, 10:7層, 11:SK14, 12:4a層
1~6-8-9-10-11:西衣壺(1:箕徳利を逆位で利用、2~8-9:土師質鉄金を利用、6:専用器、11:土師質鉄金を火鉢として転用後に利用)。
7:光明田(土師質小皿)、10:新壺(土師質)、12:錫(錫製、底面に重曹調節のための追加あり、荷重155g)

9. 兵庫津遺跡 第31次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫の港と港町を中心とする中世から近世の遺跡である。

兵庫の港は、古くは「大輪田泊」と呼ばれ、瀬戸内海航路の基幹港として栄え、平清盛の大修築により、日宋貿易の拠点港として繁栄した。中世には「兵庫津」と呼ばれるようになり、大地震や大火などの災害に遭いながらも、流通経済の重要港として発展し、近世には西国街道も兵庫の町を経由するようになった。幕末には、他の重要港と共に兵庫（神戸）開港を迎えている。

兵庫津遺跡では、これまでに30次に及ぶ発掘調査が実施され、平成13年度に、今回の調査地の西側近隣地で実施された第26次調査では、「元禄兵庫津絵図」〔元禄9年（1696）〕そのままに近世の真光寺境内を巡る溝、道、水路等が検出され、注目された。



2. 調査の概要

調査地は、従前建物の基礎等による搅乱の影響を大きく受けており、遺構面が遺存していたのは中央部と南半部西側の一部であった。調査地の基本層序は現況地表面から110cm前後まではコンクリート碎片などを含む搅乱層で、この下に近世の遺構（第1遺構面）を検出した。この下層からは3層の整地面が確認されたが、遺構は検出されなかった。出土遺物から近世後半の整地層と考えられる。この整地面の下層に、中世後期の遺構面2面を検出した。

第1遺構面

近世後半の遺構面である。濠状遺構1ヶ所、土坑1基を検出した。

S D01

調査区中央部で検出した濠状遺構である。掘形の幅7.5mであるが、北側は搅乱の影響を受けており、元来の幅はもう少し広がる可能性が考えられる。両岸には杭と板材を用いた土留めが検出され、この幅から約5.5mの幅の濠であったと推定される。検出面からの

深さ90cm、東西方向で、西側で矩形に完了している。埋土は大きく3層に分けられ、多量の遺物が出土した。川土遺物は瓦、陶器、磁器、十師器、木製品、銅錢等で、近世後半（18世紀前半～19世紀）のものであると考えられる。

第2遺構面 京町時代の遺構面と考えられる。

溝5条、土坑8基、ピット3基を検出した。

S K204 調査区南半部南西で検出した径70cm前後、検出面からの深さ20cmの土坑で、埋土は2層に分かれ、上からやや明るい褐灰色細砂、褐灰色細砂である。掘形内には陶器の甌の底部が据えられたような状態で遺存していた。この他、埋土内から十師器の皿が出土している。

S K206 調査区北半部西側で検出した。径1.8m前後、深さ15cm前後の不定形な土坑状遺構である。西側は搅乱の影響を受けており、全体の規模は不明である。当初2基の土坑であると考えられたが、掘削した結果、1つの遺構であることが確認された。埋土は2層に分かれ、上層から灰褐色細砂、褐灰色細砂である。大量の遺物が投棄されたような状況で出土した。出土遺物は大半が土師器の皿で、須恵器、陶器なども含まれる。

第3遺構面 地山層である淡褐色細砂・灰色細砂で検出した遺構面である。溝3条、土坑4基、ピット4基を検出したが、上層で捉えることができなかった遺構も含まれる可能性もある。

S K301 調査区北半部東側で検出した径50cm前後、検出面からの深さ19cmの土坑である。10個体以上の土師器の皿が出土した、上半は逆位で数枚を重ね、下部は正位置で据えており、数個のまとまりがあったようである。これらの状況から地鎮等の祭祀に関わる遺構と考えられる。

3.まとめ

調査の結果、3面の遺構面を確認することができた。

第1遺構面で確認された濠状遺構S D01は、『元禄兵庫津絵図』からは当該する濠、水路等は確認することができない、形状からは、入江から小船などで物資の搬出入するための水路として、利用されたものではないかと推定される。『元禄兵庫津絵図』では調査地付近は南北方向の水路、道路、南西から南東へV字形に屈曲する道路、「同心ヤシキ」、「内堀」の記載があるが、これらのいずれも確認することはできなかった。西側隣接地で



fig.84 第1遺構面平面図

の第26次調査では、元禄期以降に町の拡大化が進行して行く様相が確認されており、今回の調査地においても多量の瓦の出土等から、同様の傾向と考えられる。このような町の拡大化の中で、新たに水路として開削がなされたのであろうか。

第2・3造構面では室町時代の造構面を検出し、造構が確認できたことは大きな成果であった。第2造構面SK204、SK206、第3造構面SK301出土遺物は当該期の一括資料として、重要であると言えよう。

これまでの周辺の調査においても、室町時代のものと考えられる造構がわずかに確認されていたが、今回の調査により、この付近に中世後半～末にかけての造構・遺物の分布の広がりが推定されることが確認された点は、兵庫津遺跡全体を考える上で重要なものと言えよう。

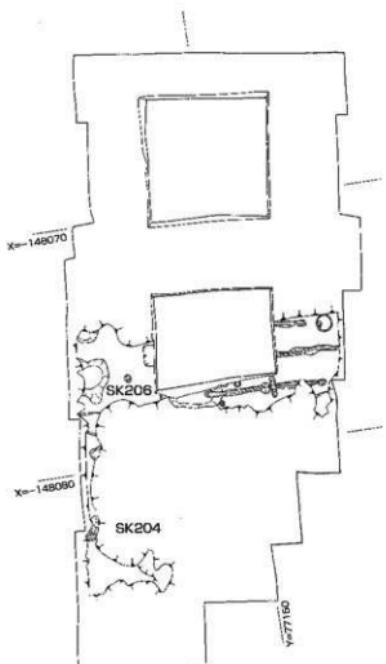


fig.85 第2造構面平面図

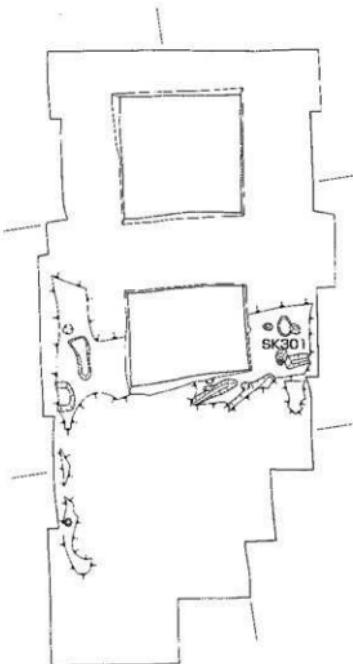


fig.86 第3造構面平面図

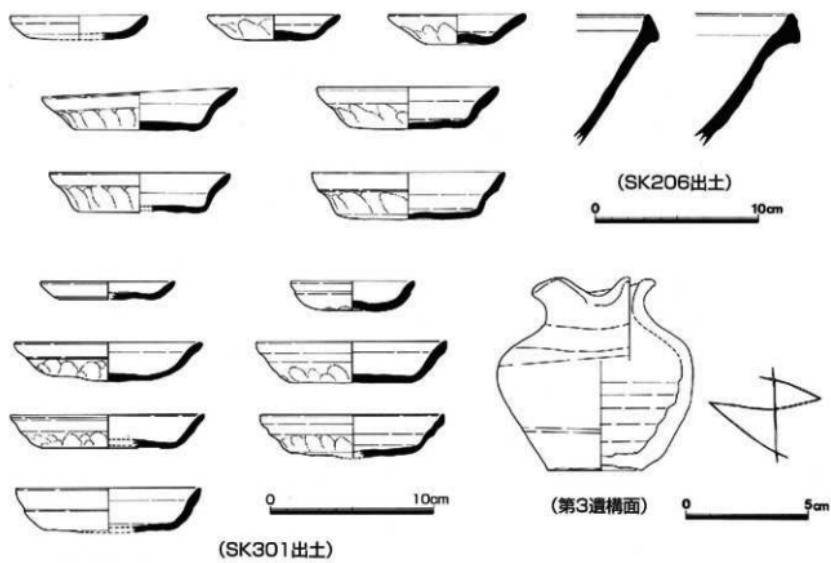


fig.88 出土遺物実測図

10. 兵庫松本遺跡 第12-1~4次調査

1. はじめに

兵庫松本遺跡は、六甲山系から流れる旧湊川をはじめとする幾つかの小河川によって形成された扇状地上に位置する。

平成10年度の市営住宅建設に伴う調査から、今日までに6次にわたる調査が行われ、縄文時代末から平安時代までの遺構・遺物が確認されている。主に確認されているのは弥生時代末～古墳時代初頭頃のもので、掘立柱建物・竪穴住居などが発見されており、集落が存在したことが判明している。周辺には楠・荒田遺跡や上沢遺跡が存在する。



2. 調査の概要

今回の調査地は、南北4地点に分れており12-1次を除き区画整理対象地の南部に位置する。今回も第1次調査地（現松本東住宅）周辺の調査地で竪穴住居などが確認された。

基本層序は、北側では盛土・耕作土の下に弥生時代前期から古墳時代初頭に及ぶ5面の遺構面が、一方南側では盛土・耕作土の下に弥生時代前期の遺構面が検出されている。また一部には、縄文時代晩期の土器が出土している。

12-1次

区画整理事業地の北部中央で、平成10・13年度に弥生時代末期から古墳時代初頭の住居が確認された調査区の東隣に位置する。調査地は、長さ31m、幅4mのトレンチである。

第1遺構面

出土遺物から弥生時代末期から古墳時代初頭と考えられる遺構面である。主な検出遺構は、竪穴住居3棟・溝4条・長方形の落ち込み1基である。竪穴住居は、いずれも1辺4m前後、4本柱の方形プランのものと考えられる。SB



fig.90 第12-1次 SB101・102

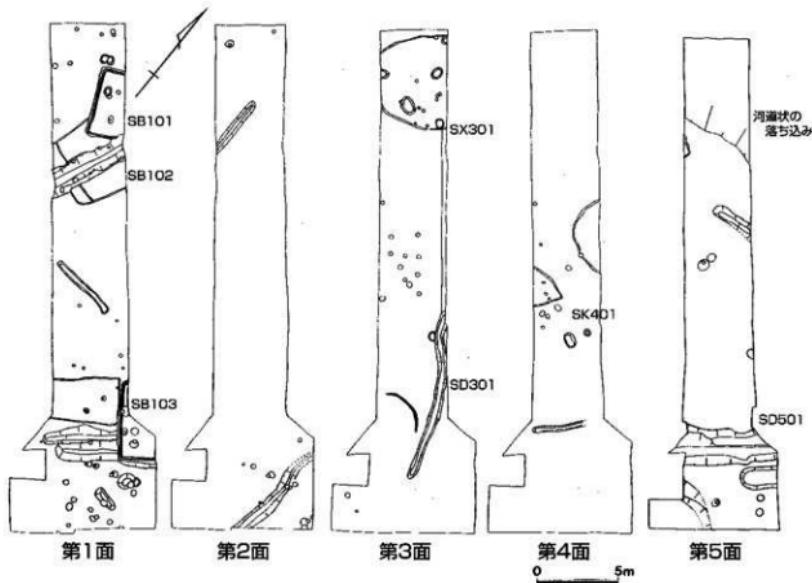


fig.91 第12-1次 調査区平面図

102については、幅1m、高さ0.05mほどのベッド状遺構が南辺に造り出されている。なお、調査地の南部には、ピットがまとまって検出されているが、建物を復元できるまでにはいたっていない。

第2遺構面 出上した遺物がわずかなため、周辺の状況から推察すると、弥生時代中期の遺構面と考えられる。検出した遺構は、溝2条・ピット16基である。上層の遺構による搅乱により、現在確認できる遺構が少ないものと考えられる。

第3遺構面 出土した遺物から弥生時代前期から中期と考えられる遺構面である。検出した遺構は、不整円形の落ち込み1基・溝2条・ピット14基である。落ち込みは、最大径6m、深さ0.05m前後の規模である。内部には土坑が5基・ピット10基を検出している。その中には柱穴と考えられるものは存在せず、住居跡の可能性は低い。

第4遺構面 出土した遺物から弥生時代前期と考えられる遺構面である。検出した遺構は、溝1条・不整円形の落ち込み1基・不整形の落ち込み1基・土坑2基・ピット9基である。落ち込みは、いずれも深さ0.05mと浅いものである。また土坑SK401からはほぼ完形の鉢が1点出土した。

第5遺構面 出土した遺物から弥生時代前期と考えられる遺構面である。検出した遺構は、河道状の落ち込み1基・溝2条・土坑1基・落ち込み1基・ピット6基である。河道状の落ち込みは、調査地北側で検出されたもので、拳大から人頭人の躰が大量に堆積していた。また、調査地南部で検出されたSD501からは、ほぼ完形の甕が1点出土している。



fig.82
第12-1次
自然河道内
遺物出土状況

12-2次

区画整理事業地南部中央に位置する。他の調査地とは異なり造成時に削平を受ける部分で、長さ9m、幅3mのトレンチである。

検出した遺構は、落ち込み1基・円形土坑2基・ビット26基である。ビットを数多く検出したが、いずれも深さが、0.05~0.1mと浅く、柱穴と考えられるものは存在しない。なお、調査地西辺は既存建物及び、その解体時に大きく搅乱を受けている。

12-3次

区画整理事業地南辺の西半部分に位置する。調査地は現道拡幅部分で長さ約20m、幅約1mのトレンチである。12-2次とは異なり遺構面は3面検出されている。

第1遺構面

出土遺物などから弥生時代前期から後期と考えられる遺構面である。検出した遺構は、溝状の落ち込み1基・ビット2基・土坑1基である。溝は幅1.2m、深さ0.2mで、茶灰色シルト質極細砂が堆積していた。土坑は平面形が長方形で、検出長1.4m、幅約0.5m、深さ約0.2mである。これも溝と同様に、茶灰色シルト質極細砂が堆積していた。その形状から土坑墓である可能性がある。

第2遺構面

第1面よりも以前の遺構面と考えられる遺構面である。しかし遺物も弥生時代前期から後期の遺物が出土しているため、詳細な時期は不明である。遺構は、落ち込みのみである。この落ち込みは、第3面の縄文時代晚期の落ち込みの埋没の一段階を捉えたものと考えられる。

第3遺構面

縄文時代晚期の河道状の落ち込みを検出したのみである。幅約7.0m、深さ0.6mである。



fig.93 第12-2次 調査区平面図

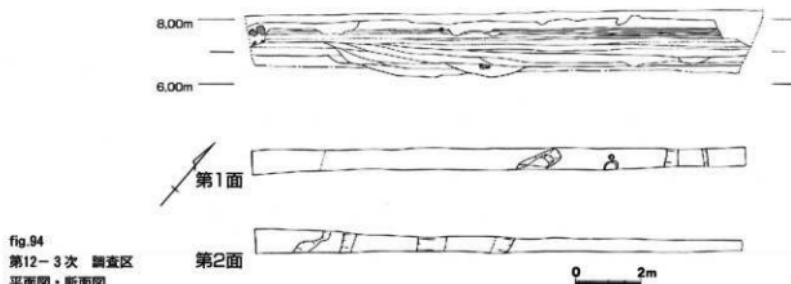


fig.94
第12-3次 調査区
平面図・断面図

埋土からは、縄文時代晚期の突帯文土器および、滋賀里Ⅲb式のリボン状突起のついた浅鉢片などが数点出土している。

12-4次

区画整理事業地南西部に位置する。現道拡幅部分で長さ約15m、幅約6.5mのトレンチである。遺構は、縄文時代晚期から弥生時代前期の河道状の落ち込みを検出したのみである。弥生時代前期の段階では深さ0.5mほどで、一部畦畔状に高く残る部分や、不整形な落ち込みが多数確認された。また、縄文時代の段階では深さ1m近く突帯文土器・木片などが検出された。西側にさらに落ち込んでいくが、湧水が激しく確認できなかった。

3. まとめ

今回の調査では、これまでの調査成果と同様に、北側の調査地で竪穴住居などをはじめとして弥生時代前期から古墳時代初頭の遺構・遺物が比較的まとまって確認された。一方、南側ではピット・土坑などは検出されたが、竪穴住居などの遺構は検出されなかった。また12-4次調査地で、弥生時代末期から古墳時代初頭の集落を画する河道の肩部が検出されており、河道がさらに真っ直ぐ南に延びていることが判明した。



fig.95
第12-4次
調査区全景

11. 兵庫松本遺跡 第14・15次調査

1. はじめに

兵庫松本遺跡は、兵庫区松本通2丁目の区域内に存在する縄文時代末から平安時代にかけての遺跡である。区画整理事業の街路築造に伴う発掘調査によってしだいにその様子が明らかになってきている。

fig.96
調査位置図
1:2,500

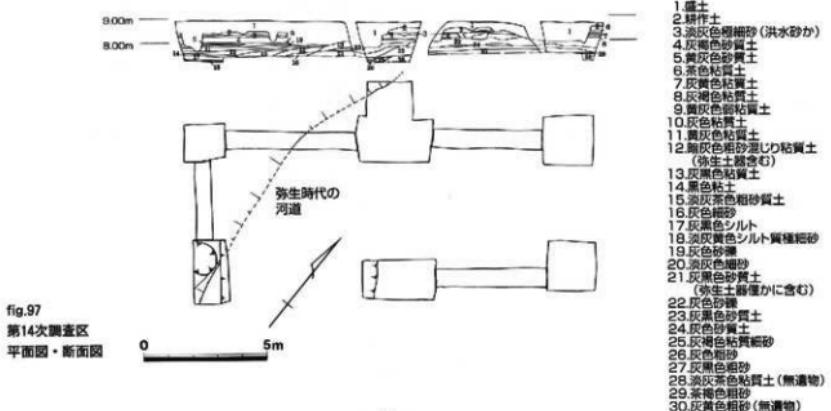


2. 調査の概要 第14次調査

今回の調査は、近接する2箇所の復興事業に伴う住宅建設に先立つ調査である。

現地表面から約0.6m下までは現代の盛土で、その下層には約0.7mの厚みをもつ旧耕作土・床土が堆積する。それらを除去すると弥生時代前期の遺物包含層（暗灰色粗砂混じり粘質土・灰黒色砂質土）が堆積し、その下のGL1.2m付近で遺構面（淡灰色粗砂・灰黄色粗砂）を検出する。

調査区北西部には、弥生土器を含む河道状の落ち込み肩部を検出した。この遺構の方向



は、第1次調査で検出された弥生時代前期～古墳時代前期の河道SR01と同じで、今回検出されたものは、その一部だと考えられる。影響深度の関係上完掘には至らなかったが、西隣で行なわれた調査（12～4次調査）の成果から、深さ0.3m前後の比較的浅いものとと考えられる。この他には近世～近代の井戸が1基検出されている。

第15次調査

第15次調査は、建物の基礎により遺跡が破壊される部分について調査を行なった。調査地内の層序は、第14次とはほぼ変わらない。検出された遺構は、縄文時代晚期から弥生時代前期と考えられる河道状の落ち込みの肩部を検出した。しかし工事影響深度の関係上完掘には及ばず調査を終了している。

3. まとめ

第14次調査では、第1次調査で検出された河道の続きを検出した。これまでの調査成果から、この河道より東側に遺構・遺物が集中することがわかっている。そのため、今回の調査地がおよそ遺跡の南端と考えられる。

また、第15次調査においては弥生時代および縄文時代晚期の河道が確認された。周辺の調査地と同様に集落の縁辺部に位置すると考えられるが、現在の遺跡範囲の南辺部で縄文時代晚期の土器が確認されたことから、この周辺にその時期の集落が存在した可能性が高くなった。

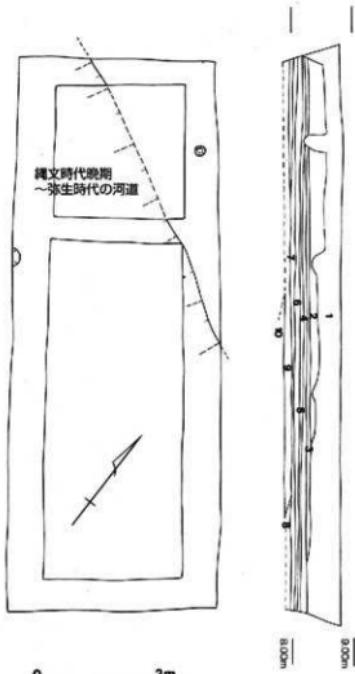


fig.98 第15次調査区平面図・断面図



fig.99 第15次調査区全景

1.はじめに

12. 兵庫松本遺跡 第16次調査

今回の調査は、兵庫松本遺跡での第16回目の調査にあたる。これまでの調査の結果、遺跡は弥生時代初め頃から古墳時代終わりにかけての集落であると考えられている。

fig.100
調査位置図
1:2,500



2. 調査の概要

基本層序は、盛土、耕土の下に中世の耕作土である灰色砂質粘土と黄褐色粘土が堆積し、この下に古墳時代の造構面である黄灰褐色粘土、さらに弥生時代の造構面である褐灰色粘質土砂が存在する。

第1造構面

古墳時代初め頃と考えられる溝、ピット等が検出された。

S D101 調査区の中央を真直ぐに横断する、幅約1.2m、深さ5cm程度の浅い溝状の造構である。

南側のほうは北側より一段深くなっている。

S B102 幅約1.2m、深さ5cmを測るL字状の溝。SD101によって切られている。

S X101 調査区の南隅で検出された角を持つ落ち込みである。中心に向かって段状に深くなっている。



fig.101 第1造構面全景



fig.102 捩立柱建物

- いる竪穴住居のコーナー部分の可能性があるが柱穴などは検出されなかった。
- ピット** この他に直径20cmから40cm程度のピットが30基ほど検出された。
- 建物** 柱間1間×2間の掘立柱建物を検出した。
- 第2遺構面** 古墳時代の遺構面の下で弥生時代終わり頃の遺構面を検出した。
- S X203** 調査区の西の隅で検出された深さ10cm程度の落ち込みである。調査区の外に広がるが梢円形のようである。内部に2基のピットがあり内1基より弥生土器がまとった塊の状態で出土した。
- 下層** 第2遺構面の下層について断ち割り調査を実施した。河川状の堆積が認められ弥生時代初めの遺物が出土した。
- 3.まとめ** 調査地一帯は、市街化が進んでおり過去の調査においては、現代の建物によって擾乱を受けている場合が多く遺跡の実態をつかみきれない原因の一つになっていた。今回の調査の結果、地層が本来の堆積状況を保つていればこの付近は、遺構の集中する場所であることがわかった。
- 兵庫松本遺跡は、比較的新しく発見された遺跡で、集落の様相や特徴など不明な部分の多い遺跡であるが最近の発掘調査の成果の積み重ねによって当時の集落の範囲などが明らかにされつつある。今回の調査についても、発見された遺構は部分的であるが遺跡の実態を知る上で有効な資料を多く得ることができた。

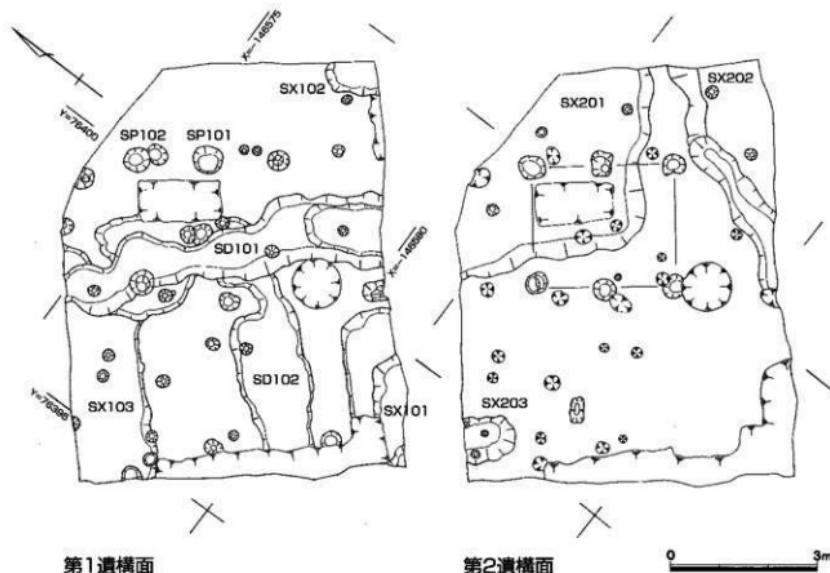


fig.103 調査区平面図

13. 上沢遺跡 第48次調査

1. はじめに

六甲山系の会下山丘陵の南西方向に派生した扇状地上に立地する遺跡である。震災以降、個人住宅の再建や山手幹線拡幅工事に伴う調査が約30回に及び調査が行われており、縄文時代晚期から中世に至る遺構が検出されている。



fig.104
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

調査地は、南側が大開通に面しており、北側に擁壁が設けられ1m程の段差がある。調査前に利用されていた駐車場の造成時に北側が面的に削平されているものと考えられていたが、包含層は全面に削平されていたものの、改良土直下に削構面を検出した。東南隅は比較的削平が少なく、旧地層が存在することから、当該地の旧地形は会下山丘陵から派生した舌状の尾根の先端に立地していたことが伺える。



fig.105 S D01



fig.106 S D01 遺物出土状況

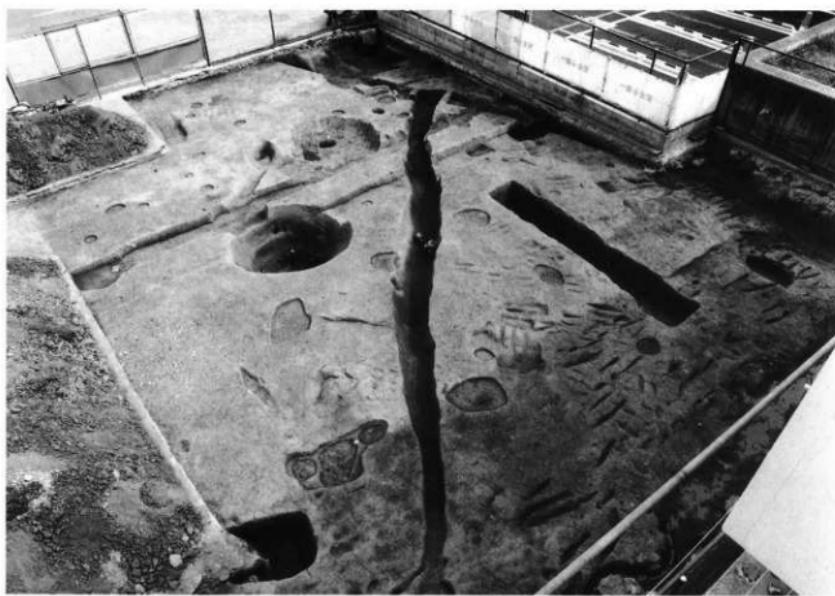


fig.107 調査区全景

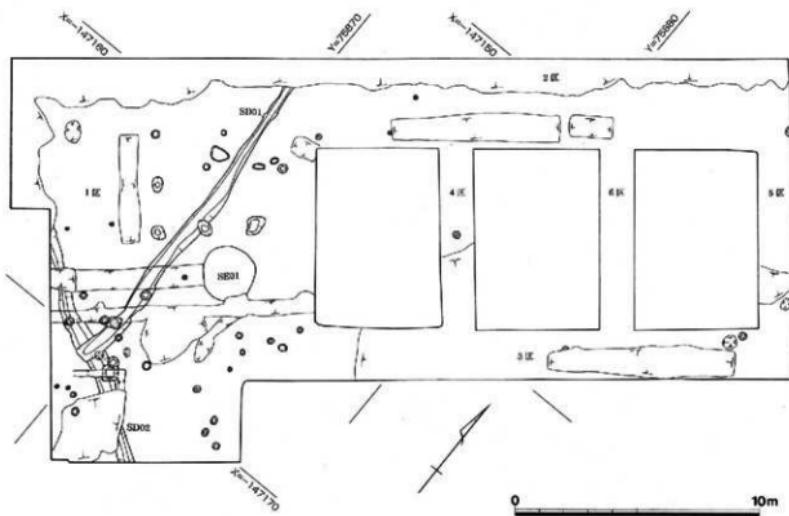


fig.108 調査区平面図

検出遺構 遺構は、ほとんどが1区に集中しており、東に行くほど希薄になる傾向がある。検出遺構は、溝2条、井戸1基、ピット多数である。

溝

溝は、南北方向のS D01と北西から南西に延びるS D02を検出した。

S D01は、幅35~70cm、深さ35~45cmの断面が緩やかに立ち上がるU字形を呈している。この溝の中からは、弥生時代後期の遺物が大量に出土した。遺物や、埋没土の状況から水が流れていたようには考えにくく、区画を意識した溝と考えられる。S D02は、幅60~80cm、深さ20cm前後の断面が広いU字形を呈している。この溝からは、S D01ほどの出土量は見られなかったが、弥生時代後期の遺物が出土している。S D01の南端はS D02と交差しS D02に遮られるように止まっているが、平面観察では、S D01がS D02よりも後に掘り込まれている。しかし、掘りなおしの可能性を考えると、同時期存在していた可能性は残されている。

井戸

井戸は、1区のほぼ中央で検出された。直径2.2mの円形の掘形で、遺構面からの深さは2.78mの規模である。80cm下がったところで井戸側の平面形が一辺90cmの方形に変化している。井戸側材としての木材などは出土しなかった。約150cmのところでは直径50cmと35cmの曲物を二段に重ね、その周りに人頭大の石を詰めた状態で湧水部を形成している。



fig.109 SE 01 (上面)

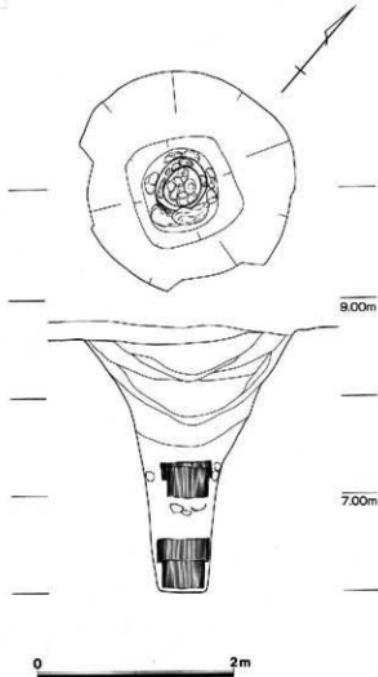


fig.111 SE 01平面図・断面図



fig.110 SE 01 (曲物)

曲物の底には、拳大の石と須恵器の塊が出土した。さらに、その下層40cmで同様の直径53cmと43cmの曲物を二段に重ねた湧水部を検出した。少量の遺物が曲物内から出土した。出土遺物から平安時代後期（11世紀末から12世紀前半）にかけて存続した井戸であり、湧水部が上下二段構造になっていることから一度埋没した井戸を再利用のため作り直したものと考えられる。

ピット ピットは、直径が20～30cmの円形のものが大半を占めるが、1区の北側と南西部に他と異なるものが検出された。北側の一群は50～70cmの長楕円形のもので、深さは25～45cmの比較的大きなものである。現在の区画とほぼ同じ角度で2mの幅で二間分をL字で検出した。建物としては北半分が検出されなかったため不明であるが、出土遺物から井戸とほぼ同時期のものと考えられる。南西部で検出したものは、1辺50cmの方形の掘形で深さが56cmの大きなものが2基検出された。内1基では直径15cm、深さ8cmの柱の沈み込みが観られる。2基が並ぶ西側は調査区外となっており、南側は大きな擾乱があるため建物になるか不明である。

なお、時期についても出土遺物の小片が少量出土したのみであるため判然としない。

3.まとめ

今回の調査の結果、同一の造構面で弥生時代後期と平安時代後半の造構を検出することができた。弥生時代後期の造構として遺物を多く含む溝が検出されたことから北側に居住スペースが存在する可能性が高い。平安時代後半の造構としては、造り替えられた井戸とその北西に存在する大きなピットが、井戸とその付帯施設の関係として可能性が考えられる。1区南西部で検出したピットに関しては、明確な時期の特定ができないが、周囲の調査結果と方形の掘形から奈良時代の建物が存在した可能性がある。



fig.112
S E01断ち割り状況

14. 上沢遺跡 第49次調査

1.はじめに

今回の調査は、上沢遺跡内の市有地の売却に伴う調査で、計3ヶ所の調査を実施した。調査区は、それぞれ49-1、49-2、49-3次調査とした。

fig.113
調査位置図
1:2,500



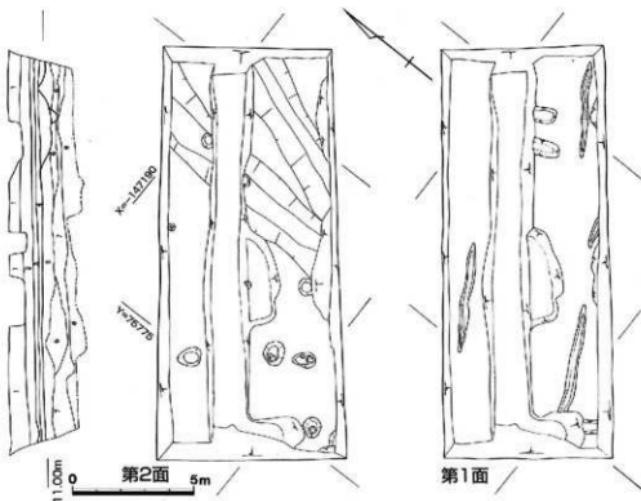


fig.114

調査区
平面図・断面図

- | | | |
|-------------|-------------|---------------------|
| 1.盛土 | 5.灰褐色砂質シルト | 9.暗黒褐色砂質シルト(SD201) |
| 2.黄灰色シルト質細砂 | 6.褐灰色砂質 | 10.暗黒褐色砂質シルト(SD202) |
| 3.淡褐色砂質シルト | 7.淡灰褐色粗砂シルト | 11.乳灰色砂質シルト |
| 4.暗褐色砂質シルト | 8.灰色砂質 | |

S D 202からは比較的まとまった量の弥生時代後期の遺物が出土した。遺物での前後関係は確認できないが、土層の状態から S D 202が先行するものと考えられる。

49-2 次調査

今回調査対象となった地区の中で最も北に位置しており、遺構面検出が一番浅い調査地区となった。西北隅に大きな搅乱がある。地形的には、高くなっている、後世の削平を全体に受けていると考えられる。

第1遺構面 溝数条と不定形な窪みを検出した。溝はいずれも幅約20cm、深さ約5cmの小規模のものであり、東西方向のものが大半を占めるが、1条だけ直交するものが検出された。不定形な窪みも深さが溝と同規模であり、同じ埋土であることから耕作に伴うものと考えられる。出土遺物は小破片が若干出土したのみであるため、明確な時期は不明であるが、概ね中世のものと考えられる。

第2遺構面 ピット、柱穴多数と溝3条を検出した。ピットは、直径20cm前後の円形のもので、深さは20cm以内のものが主体である。ピットから出土した遺物から、中世のものと考えられる。



fig.115 第2遺構面全景